
ある守護者の話。

こーこうせい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある守護者の話。

【Nコード】

N2648Y

【作者名】

こーこうせい

【あらすじ】

いつもどおりの毎日を望む一人の魔導士、アキナ。ナカジマに訪れた非日常。

魔法少女リリカルなのはStrikerSの二次創作。オリ主の二次小説ですよー！！

目指せ！週一更新！！

設定：紹介？まあ、そのへん（前書き）

12/19 『カートリッジ』追加

12/20 『ガード』を追加

設定：紹介？まあ、そのへん

人物・デバイス

アキナ＝ナカジマ（17）

男

使用魔法／防御魔法全般

魔力光／緑

13歳のころにゲンヤに引き取られる。それ以前の記憶はなく、出生がどこかは不明。

14歳のころに魔法を知り、いろいろ勉強。後にゲンヤの部隊、陸上警備隊108部隊に入る。約半年で既に好成績を残し、1等陸士の階級をもらう。

口調が悪く、目つきが悪いのでよく遠巻きに見られるが、六課ではそのようなことはなかった。

趣味は音楽を聴くこと。どんなときであろうと音楽プレイヤーは忘れない。

ガードビーツ

アキナ＝ナカジマのインテリジェントデバイス。

もともと誰かのものだったものをフォーマットして使用中。その影響が主人に対してとてもキツイ。データの中に嚴重にロックされたデータがあるらしいがなんなのかは分かかっていない。

なんだかんだいってもアキナのことを心配だったり、そうでなかったり。

使用魔法

基本的にマンガ、結界師の結界をイメージしてくれれば！
相手を貫いたり、大きさ変えたりできますよね！そんな感じですよ！
どうもイメージつきにくいと思いますが、脳内補完をがんばってください（笑）

ガード

結界とも、シールドともプロテクションとも違うよく分からないものの。
盾として使用するときには薄い立体で、基本、正方形や長方形にする。
その場で浮遊可能。また、移動もすること可能。

ガード・ランス

魔力で作った槍型の物体を相手にぶつける。
固形の生成ができることが条件。また、二つ同時に物を動かすスキルも必要。
モデルはフェイトのフォトンランサー。
威力貫通力ともに高い。が、アキナの力量が足りないためそこまででもない。

ガード・フォール

ランスの応用。

上空に設置したランスの矛先を下に向けて一気に落とす。状況的に罾として使うのが効果的。

カートリッジ

基本威力を挙げたりするだけだが、魔力の質を換えたりもできる。シールドのような固いものから、餅のようにくつついたり、水みたいにとろけたり……まあ、つじつまあわせすんまそん。

他、いろいろ。今後発表だヨー！！

第1話 急な異動。出向、機動六課（前書き）

どもも！こーこうせいです！

2つもやってるのに調子乗りました。はい。

つてか前々からやりたかったStrikerSです。実は原作コレが一番好きですよ〃ww

オリ主、オリジナルストーリーありな気がしますよ！

そーいうの無理って人はバック転しながら退却しましょう！

第1話 急な異動。出向、機動六課

新暦75年 春

そろそろ桜も満開になろうという時期。ある人は出会いに喜び、ある人は別れに涙するこの頃。
とある場所に二人の男がいた。一人はすこし年のいった男。一人は長身の男。黒い髪にキツイのが目に付く。

「ゲンヤさん。話ってなんすか？」

「ああ？お前俺のことは親父って呼べっていつてるだろ？アキナ」

そこにいたのは

時空管理局 三等陸佐 ゲンヤ・ナカジマと
時空管理局 一等陸士 アキナ・ナカジマ

アキナはゲンヤが座っている場所の正面に座った。
ソレを見てゲンヤは話し出した。

「お前が俺の部隊に入って、もう半年。お前の成長ぶりは凄いからな。俺はお前にいるんな経験をさせてやりたいと思ってるんだ」

アキナは現在ゲンヤが持つ部隊、陸上警備隊108部隊に配属されている。配属で半年だが既に数々の任務を難なくこなせている。実は魔法を使うようになったのは数年前なので、その成長振りはすさまじかった。

「はあ……」

「お前も今年で17。うちに来たときはまだちっせえガキだったが今じゃ俺よりでけえ」

「あの、話が見えねえんですけど？」

アキナは如何にも分かりません。といった顔でゲンヤを見る。

「そうだな……。単刀直入に言おう……」

お前異動な」

訪れる沈黙。この間三秒
その後現れたのはアキナから発される叫び声

「はあああああああああああああ！！？」

悪巧みをしたような顔のゲンヤと意味分らないくみたいな顔のアキナ。

「あ、ちなみに明日からな」

「はあああああああああああ！！？ってめ！そついつのは早く言えよ！！準備とかあるんだぞ！！？」

爆弾発言が投下され、見事な叫び声。
その後すぐにゲンヤの娘、ギンガに「うっさい！！」と殴られたのは秘密だ。

攻撃魔法が使えない魔導士

第1話 急な異動。 出向、機動六課

現在、アキナは自分の荷物を整理していた。正直急な異動なので何を持っていけばいいか分からない。なのでとりあえず数日分の着替えと、少し大目の金、愛用している音楽プレイヤーのみを入れて準備を完了としておいた。

明日から行くのは……機動六課、か。

一人思うアキナ

時間は少しさかのぼり、ギンガに頭をグーパーンされた後のこと

「……で？俺はどこ行けばいいんすか？ゲンヤさん？」

「おお、受けてくれるのか。ありがてえ」

いや、受けてくれるって。上司の命令は絶対でしょうが

「でな、お前が行くのは時空管理局本部古代遺物管理部『機動六課だ』だ」

「機動六課？」

聞いたことのない言葉にアキナは聞き返した。

「ああ。今回俺の下にいい狸……もとい八神が部隊を立ち上げるんだわ」

そういつつ、ゲンヤは俺に資料を渡してきた。そこに乗っているのは機動六課の名簿表。アキナはソレに目を通すなり

「ブフツ!!?」

飲んでいたお茶を吹き出した。

おいおい、何だこの面子は。

管理局のエース 高町なのは一等空尉

金の閃光 フェイト・T・ハラオウン執務官

部隊長である夜天の主 八神はやて

それに八神はやての固有財産であるヴォルケンリッターの面々

どれも管理局内の有名人物じゃないか！！

「……で？この面子の中に入って俺が何をしろと？戦力的には十分すぎますよね」

こんな面子に入ったところで俺だけ浮くじゃねか。

「もつとちゃんと見る。下のほうだ」

ゲンヤに言われ、アキナはリストの下のほうを見る。
そこにいたのは

「スバル？」

「ああ。もつと下を見てみな」

スバルというのはゲンヤの娘。

ナカジマ家は大黒柱、ゲンヤをトップにして、年齢順にギンガとアキナ、スバルといる。ギンガとアキナは同じ17歳だ。ギンガとアキナはゲンヤ率いる陸上警備隊108部隊に所属していて、スバルは訓練校を卒業後、災害救助の方の部隊に入った。

名簿をさらに下に見ていくと。そこにいたのはティアナ・ランスター、エリオ・モンディアル、キャロル・ルシエとある。

スバルを含めるすべてのメンバーがほとんど実戦経験もないような新人。エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエなんてまだ10歳だ。

「……………どいつもこいつも新人ばかり……………」

「ああ、そつだ。隊長陣は有名でもその下がな。だから俺はお前に頼んだんだよ。お前は新人ではあるが既に任務をこなしてるし、実力もある。それにこれから先のためにもなると思う。どうだ？そこまで悪い話じゃないだろ？」

うーん、とアキナは呻く。

「いやね？正直面倒くさ……………俺より実力ある奴の方が……………ほら、ギンガとか」

「お前今めんどくせえつつたろ？ってか話し聞いてたか、おまえ。それにギンガはダメだ。」

「なんで」

「娘に怪我をさせると」

「俺ならいってか！！？」

くそつ。俺の扱いひでえな

「ま、俺はお前を信じてるんだよ。じゃ、明日から頼むわ」

それだけ言っただけでゲンヤは部屋を出て行った。一人部屋に残されたアキナは

「仕方ねえ！いっちょやってやりますか！..」

と決意を決めた。

辞令伝達

アキナ⇨ナカジマ（17）

明日より時空管理局本局 古代遺物管理部 機動六課へ出向を命ずる。

第1話 急な異動。出向、機動六課（後書き）

感想待ってます…ってか1話じゃ無理だよなw

第2話 始動(前書き)

結局二日連続更新です(笑)

まあ、たいした事やってませんけどね。

ティアナとは、なんとなくくっつけたい今日この頃。

第2話 始動

8 : 1 2

「はやてちゃん。今日から始動、だね」

「そやね……これは私の夢でもあるんや。 氣い引き締めな」

今私、高町なのははこれからお世話になる機動六課の隊舎の部屋を
一つ一つ回っている。

機動六課は私たち3人の夢でもある。いろいろな人に協力してもら
ってやっとできた部隊。大事にしなくちゃいけない。

「それにしてもよかったね、なんとか隊員集まって」

「ほんとや……なのはちゃんとフェイトちゃんの紹介がなかった
ら今日はじめられなかったわ」

はやてちゃんは思いつきり息を吐きながら言った。

実はメンバーを集め終わったのはこの間だったりする。原因は直前
まで相談しなかったはやてちゃんと、そのはやてちゃんに知り合い
がほとんどいないって言うこと。本局に顔が利く人がほとんどいな
いせいで後見人もみんな身内。部隊が発足できたのも後見人の功績
のおかげって言うのが大きい。だから今回の部隊のロングアーチは

誰もが知っている人とか、過去にお世話になった人ばかり。知らないのは今回スカウトした新人達ぐらいかも。

「そういえば、はやてちゃんが言ってたもう一人の隊員ってどうなつたの？」

「ああ、ゲンヤさんが紹介してくれた人ね。私もよく知らないよ。ゲンヤさんの部隊にいる新人で優秀な成績を残してる人らしい。私らの隊員が新人ばかりなのが気になったんで、こいつ貸したるっ！
って」

「にははは……私がスカウトしたティアナとスバル、フェイトちゃんのところのエリオとキャロも新人だもんね」

「せや。と、そこで紹介してもらったんよ」

「へえ……どんな魔法を使う子なの？」

そういつて私ははやてちゃんから資料を受け取った。
そこに書いてあったのは

「アキナ^{II}ナカジマー一等陸士……あれ？スバルの家族の方なんだ。
保有魔力量B⁺、陸戦ランクB……使用魔法……プロテクション！
！？はやてちゃんどういうこと！？」

「そ。そこが謎なんよ。使用魔法のところにプロテクションで……
よく分からん人なんよ。それでも陸戦ランクBって」

「どんな子なんだろうね……」

「あ、あとその子の推薦者はゲンヤさんだけやないで？なんとユーノ所長も推薦しとる」

「ユーノ君が!!?」

なんでユーノ君が……

「面白い舞台になりそうだね……」

「私も楽しみや」

私達は心躍らせながら引き続き部屋を回る。今日の9時に全員が集まる。私は既にそのことが待ち遠しくて仕方がなかった。

第2話
始動!

8:53

「うん……?」

くあ……!!よく寝たなあ……

アキナは自分のベッドから起き上がり大きく伸びをした。体の骨がポキポキと音を立てた。

「つてか今何時だよ……」

そういつて自分の頭の上にある時計を見ると

8:54という文字

ここから隊舎まで軽く20分はかかる

えーと、新人セレモニーが9時からだから……

「ド遅刻ド欠席!!!?」

アキナは光のごとくの速さで着替え、荷物を持ち、準備した。

てかなんで目覚ましならねえんだよ!!!昨日ちゃんとセットしたのによあ!!!

自分の部屋から出て、階段を降り、玄関まで来るとそこにはなぜか

ゲンヤが

「おいおい！どいてくれよ！早速遅刻しそうなんだよ！！？」

「まあ落ち着けて。まず目覚まし止めたのは俺だしな」

……今すげえ発言したなオイ

アキナは自分の荷物を地面に置いて、ゲンヤと対峙するように立った。ゲンヤはソレを見た後に口を開く

「お前がこれから行く部隊の新人はまったくいいほど経験がない。その中でお前は唯一経験のある新人だ。お前がリーダー格じゃねえのは分かってる。だが、そいつらを引っ張って行ってやってほしい。コレは狸の夢でもある。ぶち壊したくねえんだ。だから頼む」

「ゲンヤさんが頼みを出すなんて珍しい。天変地異の前触れか？」

アキナは冗談交じりに笑う。しかしゲンヤの顔は真剣そのもの。アキナもソレを見てまじめな顔に戻す。

「でも、もちろん全力でやらせてもらうっすよ」

「ああ………なら、行って来い」

「っす」

アキナはゲンヤの隣を通り過ぎ家を出た。その顔は少し誇らしげな顔。威風堂々、道を歩く。
アキナはうれしかった。多分はじめて、ゲンヤに頼まれた、任されたからだ。

しかしそんな顔は長続きしなかった

俺、ゲンヤさんのせいで遅刻してんじゃん
どーしてくれる。初日から時刻だよクソ野郎

9 : 1 2

新人セレモニーを始めて、部隊へのあいさつを終えたんやけど……

「アキナ君、来てないね」

「どうゆうことやろなあ……すでに新人達は顔合わせてる言つのに」

なぜかアキナ君だけ来てへん！まったく！……と、怒るとるところに通信が。

ゲンヤさんから？

『おう、八神。部隊のほうはどうだ？』

『どうだもクソもまだ始まつとりませんがな。ソレよりゲンヤさん、アキナ君知りませんか？』

『ん？アキナの奴か？あいつはもうすぐ行くんじゃないか？俺が目覚まし止めといてやったから遅れてるぞ』

『……………』

何しとるんやこの人は……………！！

『ほら、来たみたいだぜ？じゃ、後は頼むわ』

そういつてゲンヤさんは通信を切った。

そして入り口のほうを見てみると長身黒髪の日つき悪い男が走ってきた。

「あ、アキナ、ナカジマ、一等陸士です…今日から、お世話に、な
りま、す……………」

「焦らんでええで。事情はゲンヤさんから聞いとる。詳しい話はもう聞いてると思うから、ほら、向こう行って新人と顔合わせしとき」

「りよ、了解です」

アキナを新人のほうに送り、一息。
一悶着あったにせよこれで全員そろった。本日を持って、機動六課は始動した。

はあ、なんでこんなに走んなきゃならねえんだろ。
っと、新人はこいつらか。まだ会ったばかりのはずだけど、まあ話せてはいるみたいだな。さて、ちよつと脅かしてみるかな。主にスバルとティアナを。

アキナはスバルはもちろん、ティアナとも顔見知りだ。スバルがまだ候補生のとき、休暇中に街中で会って、それからいろいろの話をしたら、まあ、少なくとも顔見知りにはなっている。話の内容は随分重かつただけど、ソレはまたいつか。それ以来ティアナとはいろいろメールとかもしてるから、拒絶はされないはず。

そうしてアキナはスバルとティアナの後ろからゆっくり近づいた。
新人4人は円を組むように立っているの、スバルとティアナの二人の前にいるちびっ子達……たしかエリオとキャロからは丸見えだ。
途中エリオとキャロがこっちに気づいたのだが

(シーー！)

口の前に人差し指を当てて、黙ってる、のポーズ。

さて、どんな会話をしてるのかな？

「そんな風に呼ばなくていいわよ。堅苦しいからティアナでいいわ」

「私も。そういう呼ばれ方苦手だからスバルでいいよ」

……ティアナも丸くなったなあ

前にあったときはもつと硬かったのに。スバルのあほ丸出しは変わらんが。

「じゃ、じゃあスバルさんとティアナさんで」

「私もソレでお願いします…」

あ、馬鹿。そんなにどもつたらばれちまうだろエリオ君。
まあ、バレルのは早いほうがいいか

「どづしたのよエリオ。そんなにどもつて」

「い、いえ。何でもありません!!」

ここはエリオに習って…

「じゃ、俺もお前らのことはティアナとスバルって呼ばせてもらおうわ」

「「え?」「」

二人は同時につぶやき同時にこっち向いた。そのときの顔といったらもう…笑いが止まらないよ

第2話 始動（後書き）

使用魔法プロテクション（笑）

事実上無能ですねw

まあ、うまく使っていけますけどね

次は新人演習という初戦闘のはず。うまくいけばデバイス出るかもですね。

っていうかこんな書き方でいいのだろうか？

ちよつと不安です（笑

ではまた次回に

感想待ってますね（わら

第3話 結成フオワード陣！！ついでに初訓練！！（前書き）

っと、いうことで今回早速戦闘描写。

難しいよね。アキナさんの魔法については次回やるんで、そんなに
つっこまないでください。

でわでわ、どぞー

第3話 結成フワード陣!! ついでに初訓練!!

「「え？」」

このときのあたしの顔はどんなだったんだろう？
久しぶりに会うアイナさんの顔を見てぽっかり口が開いていた気がする。

「あ、アキナさん!!?」

「アキ兄!!」

「二人とも久しぶりだな！元気だったか？」

「はい！」

「うん！」

実はアキナさんはあたしの兄、ティードと友人だった人で、部隊での兄の話をよく聞かせてもらった。10歳のころに兄に会って魔法のこととか教えてもらっていたらしい。同時に訓練とかも見ていたそうで、今ではあたしの知らない兄のことを知る少ない人の一人だ。初めて会ったときは目つきの悪い不良かと思っただけど、メールなど

をしていくうちに悪い人ではないと分かり、気づけば3年ぐらいメ
ールが続いていた。でも会うことはできなかったので、今回が久し
ぶりの会話だ。

「アキナさんもこの部隊に？」

「ああ。フワード陣の一人になるらしい」

「やった！！アキ兄とも一緒だ！！」

スバルはアキナさんの腕にしがみついた。

兄弟のじゃれあいもいいけどもう少し周りを気にしてほしいわ……。
エリオとキャラロがポカンとしちゃってるじゃない。

「紹介するわね。こちらはスバルの兄に当たる」

「アキナ〓ナカジマー一等陸士だ。よろしくな」

「は、はい！エリオ〓モンディアル二等陸士、10歳であります！」

「キャラロ〓ル〓ルシエ三等陸士、私も10歳であります。それで、
こっちが白竜のフリード」

「きゅる〜っ！」

「俺もなんだかんだで新人だからな。これからよろしく頼むわ」

「「はい！」」

ちびっ子達のいい返事。

実はここで働くのは結構不安だったけど、この部隊ならなんとなくやっていけそうだ。

「んふん~~~~」

「あなたはいい加減にきなさい!~!」

「フゴツ!~!??」

問題はスバル一人ね

第三話

フォワード陣結成！！ついでに初訓練！！

俺は今、エリオと一緒に更衣室にいる。

なんでも、早速オレ達の新人演習が始まるらしい。

今回の教官は高町隊長。エースオブエースに見てもらえるとは、なんと上がるね。

オレ達は着替えながら話をしていた。

「そういえば、エリオはどんな戦闘型なんだ？」

「は、はい！近代ベルカ式デバイスの近接型であります！」

「そんな堅くなくていいよ。せつかく仲間になったんだ。気楽に行こう。んで？近代ベルカか……扱いムズク無いか？」

「い、いえ、慣れればそんなでも………ところでアキナさんはどんな？」

「俺？俺はストレージ。一番扱いやすいからな」

そういつて俺はエリオに自分のデバイスを見せる。

つつても入隊のときに支給された奴をちょっと改造しただけの安物。それに型もかなり古かったりする。ちゃんと整備はしてるけどな。

「ストレージデバイスですか……使い込んでますね……」

「まあな……そろそろ行くこうか」

「ですね」

あんまり待たせちゃ悪いからな。オレ達は訓練場に向かった。

……

と、訓練場に着いたわけだが

「「「「「広っ！」「」「」「」

そこは見渡す限りの平面。ドンだけでかいとこ使ってますか。

「じゃあ準備はいいかな？」

高町隊長が俺らに呼びかける。

俺はうなずくこととしたんだが……

「本当にここでもやるんですか？」

「何もありませんよ？」

あゝ

なるほど。空間プログラム使ったことねえのか。

高町隊長はちょっとにやけて

「シャーリー！」

と。するとどこからともなくシャーリーとフィニーノ陸士の声が。

『機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の、陸戦用空間シミュレーター……ステージ、セットアップ！』

すると出てきたのは

巨大な街一つ。

すげえな。ここままでかいのは初めてだ。写メ撮っとこ。

ぴろり〜ん

うん。いい写真。

「今日から皆には、ここで訓練してもらおうから。頑張ろうね」

「「「「はい!」「「「「」

ここ使えるってのはうれしいな。108部隊のときはボロ屋の前の広場だったからな。たまに本局の訓練場使わせてくれたけど。ゲンヤさんの力不足だなこりゃ。

ゲンヤさん、元気かなー……まあ、多分ギンガに怒られてるんだろ
うけどさ

- - - - -

さーて。今回の敵はどんなのだろうね?
とりあえず俺らは軽い運動をして、アップを済ます。あと一応コー
ルサインの確認とかも。

そんなことをしていると無線から高町隊長の声が

『準備はいいかな？なら早速いってみようか。まずは軽く8体から
そんな声が聞こえたかと思うと俺らの前に歪な形の機械が。
あれ？これって

「ガジェットツスか」

『あれ？アキナ君は相手したことあるの？』

お？これは訓練回避フラグ……

「まあ、部隊で何度か」

『そっかそっか。なら、がんばってみんなを引っ張ってあげて』

じゃなかった。

ちよつとサボれるかも、って思ったんだけどな。

『私達の主な仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理。その目的
の為に、これから戦うことになる相手が……これ。自立行動型魔導
兵器。これは近づいたら攻撃してくるタイプね』

俺が相手したことがあるのとは違うみたいだな。

俺が前に相手した奴はなんかへんな触手が出てた近接タイプだった。

『攻撃は鋭いからね。まだ皆には強い相手かもね。じゃあ、早速行こうか。第一回模擬訓練！15分以内にターゲットの捕縛か破壊』

早速か。

皆顔がこわばっている。まあ、得体の知れない相手は怖いよな

『アキナ君は相手を知ってるみたいだから、最初の3分は動いちゃダメだよ。皆の指示も禁止』

マジすか。

『それじゃあ、ミッションスタート!!』

戦いの火蓋は落とされた。

さてさて、ミッションスタートから3分。卓上計算だと既に3体は倒してないときついんだが、いまだ倒した数は2体だ。

まず全員の動きを見ていて思うところがいくつか。ティアナの指示はいい方だが……。まずはソレを言ってからかな。

それと思った以上にAMFがキツイらしい。

AMFってのはアンチマジックフィールドっていう、まあいわゆる魔法が聞かない空間のことだ。正確には工夫をすれば攻撃は通る

んだが、こいつらはさっぱりみたいだ。唯一分かってるのは……ティアナぐらいか。

「さーて、俺も動くかな。今から言うこと全員よく聞け！」

そういつて俺も動き出した。全員が俺の声に耳を傾ける。

「まずスバルとエリオ！二人でつぶしにかかるのはいいけど互いに邪魔しあってどうする！！もっと互いに声出せ！そうすりゃ見合うことなんて無くなる！」

俺の声を聞いて互いに顔を見合わせるスバルとエリオ。だからソレがだめっちゅーねん。

「次にキャラ！もっと自信出せ！フォローの仕方は良い！けどちょっと遅いぞ！スバルたちがつつこむ前に補助はかける！」

キャラはソレを聞いて少しうつむく。ああ、こりゃ本当に自信ないんだな。フリードが心配しちまってるじゃねえか。

「最後、ティアナ！良いぞ、もっとやれ！！ただ多重弾核は魔力食うから配分に気をつける！あとスバルたちの指示は今までどおり任せた！」

ティアナはソレを見て頷いた。よし、これで大丈夫だろ。多分ギリギリクリアが限界だけだな。

さ、俺も作業に入るかな。……と、その前に

「キャロ！スバルたちに威力強化の魔法かけたらこっち手伝ってくれ！」

「はい！！！」

よし、俺のほうもコレで大丈夫だ。あとは皆の実力次第。がんばってくれよ？

「さ、後10分。クリアできるかな？みんなは」

私は一人上空で皆の動きを見守る。はじめ2分は動きが堅かったけど、だんだんスムーズになってきている。アキナ君が戻ってからはどうだろうね？

「皆よく走りますねえ」

「まだまだ危なかしくて、ドキドキだけだね」

そういつつも私の顔はにやけてるんだろうな。
だって楽しみで仕方ないもん。教え子が強くなるのは教導官にとっ
て一番うれしいことだから。今回は皆筋がいいからよく伸びるね。
きつと。

「データの方はどう？ シャーリー」

「いいのが取れてます。5機ともいい子に仕上げますよ」

この分なら、5人に淒く合った設定のデバイスが造れそう。
と。

私はいつか私を超える人が出ればいいなあ……と、思いつつ、皆の
様子を見ることに専念した。

アキナ君が戻ってから皆何か言われたみたいで、動きがよくなった
ね。じゃあ、お手並み拝見。

- - - - -

どうやらさっき俺が言ったことは効果があったようだ。エリオとス
バルははじめよりもいいコンビネーションを見せていて、ティアナ
も順調。気づけば残りのガジェットは3機。残り時間も4分と言っ

たところだ。

「さて、俺も動こうか。準備はいい？キャロ」

「は、はい！！」

まだ緊張が抜け気ってねえな。ってかだからこそ俺のほうに寄越したんだけど。

皆のほうにやって失敗を繰り返すのもいいけど、この子は心が弱そうだ。プレッシャーで押しつぶされちまったら何もできなくなるし、多分。

「目の前に2体がジェットがいるわけだが、1秒でいい。動きを止めることはできるか？」

「は、はい、多分。一つ試してみたいものがあるので」

「ん。了解だ。じゃあ今からきっかり1分後頼むよ。俺の魔法はちよっと難しくてね、詠唱って言うか計算が必要なんだわ」

「分かりました！」

本番はこういうことできねえんだけどな。今回は近づかない限り攻撃してこない。まあ何もやらなければ安全ってわけだ。

つと、早く魔法組み込まないとな……

- - - - -

1分後

「よし！キャラ！頼む！！」

「はい！！」

私は今のところ自信がある魔法で相手を拘束するべく、詠唱を始めた。

「我が求めるは戒めるモノ、捕らえるモノ。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。」

錬鉄召喚“アルケミックチエーン”！！！！

地面から鎖を召喚。うまい具合にガジェットを絡めとった。だけど2体というのが私にはきつかったのか、一瞬足止めしただけで鎖が解けそうになる。でも、ここで負けるわけには行かない！私は何とか踏ん張って、1秒、たった1秒の隙を作った。

「アキナさん！！」

もう、無理!!
するとアキナさんは

「っはは、すげえじゃねえか……こつちも準備完了だ!!」

その隙を見逃さないよう、胸の前で手を組んだ。
そして相手のほうを向いて手に力をこめた。

すると驚くことに目の前の2体のガジェットは爆発するかのよう
に壊れていった。

「すごい……」

思わずつぶやいた。
何をしたんですか?
そう、聞こうとしたのだが

「あー疲れた」

思った以上に疲れていたみたいで、ぐったりしていた。
今聞くのも野暮なので、後で聞くことにしよう。

そんなことを考えていると

『はい! ミッションコンプリート!! 皆お疲れ様!! お話があるか

らはじめに集まったところに来てね』

なのはさんの声が。どうやらティアナさん達のほつも終わったみたい。

「アキナさん、行きましようか」

「ん？ああ、そつだな」

私達は皆が待つであろう場所に戻りました。

- - - - -

ああああああ疲れた。

いや、俺はそこまで走つたつもりないんだけどね、どうも使つた魔法の負担が大きいらしい。体がぐったり。魔力使いすぎたのかね。でもまさか2回使つただけでここまでなんてなあ……使つた魔法？それはまたいつか。

……ん？俺誰にいつてるんだ？

そういえばティアナたちはあれから4体のガジェットを倒した。ティアナのナイス射撃で2体撃破。スバルとエリオのコンビネーションで2体だそうだ。あゝあ、俺も見たかつたなあ……。

んで、今なのはさんの話聞いてるところだ。呼び方が変わってる理由な？なんか俺は『高町たいちよー』って言ってたんだけどな。スバルが『なのはさん』って呼んだらどっちかって言うところちのほうがいいということまでみんなで『なのはさん』って言うことになった。もちろん任務中は違う呼び方にするつもりだけどな。

「だから、これからがんばっていこうね！！」

「「「「はい！」「」「」」

なのはさんの言葉に皆でいい返事。訓練って感じだわ。

あ、そういえば一個気になってたんだけど

「なのはさん。今回の訓練…ってか模擬戦、評価的には？」

「そつだね……皆良いところもあつたけど悪いところもあつたからね」

なのはさんの言葉を全員がつばを飲み、待つ。

そしてそこで言われたのは

「みんな、全然ダメだね！！」

そんな元気よく言わなくても。

第3話 結成フォワード陣！！ついでに初訓練！！（後書き）

そういえば今更だけどアキナの目つき悪いつていう設定なんで入れたんだろ？正直いらないよね（笑）

当初はこの目つきでちびっ子達に怖がられて……だんだん仲良く……見たいのだったんだけど……
今回のスタンスの『兄弟』から外れる気がしたんですね

ってかなんで今この話してるんだろｗｗ
次回、デバイス回な気がします（笑）

ああ、主人公デバイス名どうしよう？
誰かアイディアプリーズですｗｗ
守備的な名前にしたいんだけどね……いっそ漢字にしようかな？ｗｗ

でわ、次回にまたｗｗ

第4話 アキナの魔法（前書き）

なんつーか、フラグびんびん。仕方ないよね。

第4話 アキナの魔法

訓練が終わって静かになった訓練場
そこでは二人分の人影が

「さあ、アキナ、ナカジマ、武器を構えろ」

「うあわ、全力で断りてえ」

マジで訓練と言う名の模擬戦の後にさらに模擬戦とかイジメ以外な
んでもねえ

「ルールは簡単だ。お前が私に一撃入れれば終了。どんな手を使っ
ても構わん。一撃入れるまでは終わらせんぞ」

「いや、入れる前に墜とされっから!!」

「安心しろ。手加減はしてやる」

しかしその顔は明らかに楽しそうな顔。絶対何度もいたぶる気でし
よこの人。

第四話
アキナの魔法

事の発端は訓練後の雑談。

vsガジェットの後に何度か訓練と言う名の模擬戦をやって皆でクルダウンをしているとなのはさんから話しかけてきた。

「ね、アキナ君。アキナ君はどうやってあのガジェットを破壊したの？一見何もやってなかったんだけどさ……」

あー……最初の模擬戦か。

「私も知りたいです！近くで見てたけどただ手を合わせただけでドカーンって！！」

そつえばあの後キャラにも聞かれかけたけど集合かかったから言えなかったんだよね

とはいってもたいしたことやってねえ

「俺がやったのはただのプロテクションっスよ？」

俺がそういふとなのはさんはあはは、と笑いながら疑問の目を向け

てくる。

「嘘でしょ？だってプロテクションはあくまで身を守るもの。私にはちょっと爆発できるようには思えないな」

確かに。プロテクションは攻撃魔法ではなく列記とした防御魔法。そつえば前に師匠から聞いたっけ、なのはさんはプロテクションがうまかったって。

でも甘いつすよなのはさん

「まあ、そつつスね。プロテクションは防御魔法だから爆発させたりする効果は無いっス」

ん……気づいたら皆聞いてんじゃねえか恥ずかしい

「ただ、ソレも使いよう、ってことですよ。なのはさん、六課のメンバー資料見ましたよね？」

「うん。アキナ君のところもちゃんと見たよ。使用魔法がプロテクションって書いてあって驚いたもの」

「つまりそついうことです。プロテクションは俺の得意魔法。派生の仕方も熟知してるんすよ」

得意魔法って言うよりはこれ以外ほとんど使えないんだけどな。

射撃魔法をしようと思ったけどうまく魔法弾を生成できないし、ましてやスバルみたいに自分の拳に魔力を集めて威力を倍増……とかもできねえ。

できたのは確か……一部のバインドと、プロテクション、あとは回復魔法ぐらいか。

RPGとかだったら完璧にフルバックのサポートタイプなんだよな。まあ、一応近接の対応としてギンガから無理やり覚えさせられた「シューティングアーツ」とゲンヤさんに言われて覚えたベルカ式の剣型デバイスぐらいは使える。もっとも、威力の付加とかはできないからただの殴り合いとチャンバラみたいなもんだけどな。

「へえ……すごいね。で、結局あの時は何をやったのかな？」

あ、説明忘れてたわ

「そつつすね……俺は口で説明とか苦手なんで実践で説明しますわ」

と、言うことで俺は立ち上がって、よく見ててくださいねーと言った。全員の視線が集まる。あー…無駄な緊張

「まず、俺はキャラ口にガジェットの足止めさせましたよね？あれは実は座標計算してたんすよ」

「座標？」

「はい。んで、座標を求めたら、今度はその場所に、コレを形成したんツス。コレはプロテクションを組み合わせたものツス」

俺はそういうと手のひらに三角錐の形をした緑色の物を形成。ちっさいからよく分からねえかもしれねえけど、実はコレもプロテクションを組み合わせたもの。

「そのときはガジェットの中にコレを形成したんすよ。んで、このちっさいプロテクションを……」

俺はその場でプロテクションに向かって魔力をこめる。そして

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

一気にでっかくした。

全員から歓声の音が。うれしいね、割と。だがスバル、お前は知ってただろっが。

「「「「「でっかくしたんす。確かにガジェットの装甲は堅いかもしれねえっすけど、中はコードとかの固まりだと思ったんで。あと、ガジェットは実は魔力で動いてるって聞いたことあつたんで、内部までAFMは作動しないと考えた結果、これがいいんじゃないかな、と」

俺は一気に説明を終えて、なのはさんの顔を見た。なんともいえぬ

表情である。どゆこと

「……すごいね。私そんな事考え付かなかったよ」

っはっはー！さすが俺。

なのはさんは

「なるほど。……これはもうちょっと練習メニュー考え直さなきゃかな……」

と、つぶやいたところで俺に向かった。

「うん、アキナ君の魔法は分かったよ。私は実はなんか別の魔法を使ってたかと思ったんだけど、本当にプロテクションだったんだね」

「あつたりめえっす」

「でね？ちよつと気になったんだけど、耐久力のほうはどうなのかな？」

「耐久力っすか……まあそれなりに自信はありますけど……」

これでも得意魔法だからな。

「そっかそっか……うん。アキナ君の訓練はとりあえずその魔法を極めようかな」

コレを聞いたなのはさんはトンでも発言をした。

「ね、ちょっと耐久力知りたいたいからさ、模擬戦しよっか」

はい？

はいはいはいはいはいはい！！！！！！？

「何言ってるんすか！！？訓練のあとっすよ！！？この状態でなのはさんと戦ったらさすがに死にますよって！！」

こんなことやってたら絶対命が持たない。聞いた話じゃなのはさんは『白い悪魔』って呼ばれてるらしいじゃねえか。なんでも模擬戦で気に入った人にはSBLって。SLBが何なのかしらねえがヤバイ気がするんだ。

しかし、なのはさんは

「平気だよ。私がやるわけじゃないから」

と。

なら誰がやるんだ？と思っていたら通信で

「シグナム副隊長いますか？」

おいおいおいおいおいおいおい！！
ちよっと待て！！

シグナム副隊長って言ったらあのバトル狂で有名な人じゃねえか！
！ある意味なのはさんよりたち悪いじゃねえか！！

『ああ、今ならあいてる。どうした？』

「すみません、ちよっとバトルデータを取りたいんですけど今日ヴ
イータちゃんお休みで」

『ああ、なるほど。久しぶりの模擬戦か。腕が鳴るな、5分待って
ろ。すぐ行く』

「おねがいしますね〜」

あはは、俺終わった気がするよ。
なあどうしたら良いんだ？スバル？

「ッ！？」

なぜか全員に目を背けられた。っは！これは死んだわ
どーしろちゅうねん

「遅れたな！！」

しかもシグナムさん早いし。3分経ってねえよ

「なんだ？模擬戦するのはこの新人か？」

「はい、よろしくお願いしますね。なるべく一撃で沈めないように
お願いします」

「承知した」

勝手に話し進めないでください。

「では行くぞ新人！」

あっはは、体かひきづられていくよー
ってかなのはさん、何すかその笑顔。

「ぐへええええ……」

「あの、大丈夫ですか？アキナさん」

「なんとかかな。初日からこんな疲れて……しかも明日早朝訓練もある
じゃねえか」

今はエリオと一緒に大浴場にいる。一日の疲れが取れるつつつか体
ごと流されそうだわ。

まあ、結局シグナム副隊長との模擬戦は瞬殺されました。

一回目の連撃は何かしのいだんだけどな……その後の紫電一閃に
やられた……

ってかなんなんだあの人は……一撃が異常に重い！！

「でも凄かったですよ！？あの連撃を防ぎきるなんて！しかもあの後力ウンターも入れてたし……」

「あれなー。ちよつとずるしたんだけどな」

「え？」

「ほら、剣筋には角度があるだろ？副隊長の一撃は異常に重かったからな。悪いがいなさせてもらった」

まあ、剣の一撃を何度も真正面から受けてたらずぐに壊れちまうからな

「エリオも覚えときな。いなす技は敵との隙を作りやすいから便利だぞ」

「は、はい！！」

結局カウンターは入らないし、拳句の果て「やるじゃないか……」とか言つて全力でこられるし。さすがに無理だわ……だめだ、早く寝たい。

「……はあ……。エリオ、俺そろそろ上がるわ」

「あ、はい！！」

「のぼせるなよー」

俺は先にながって、エリオを待つことにした。

つつても同じタイミングで入ったんだからすぐ出るだろ。

暑くてなんともいえない湿度の脱衣所を出るべくさっさと着替えて、外にあるベンチでエリオを待つ。

その間に自分の相棒、音楽プレイヤーを起動させてイヤホンを耳につっこんだ。

聞きなれた曲は自分の精神をゆっくり揺さぶり

「んが……………」

俺はぐゅっくり目を閉じた。

.....

ん？なんか聞こえるな

「……ぎだ。出力200」

「は」

「はんの……滅。じっ……よ」

「くそ、つぎ……持ってい」

「……りょうか……」

なんだこれ？言葉はぶちぶちだし、言ってる内容も意味不明。
だがなんだかなあ……聞き覚えがあるな、この声。なんつうか、背
中がぞつとするが。

思い出そうと思つが……わからねえ。

「……ん」

あ？今度は何だよ？

「アキ……さん」

あれ？

「アキナさん！ー」

.....

「うおー!?!?」

「もう、ここで寝てると風邪引きますよ?」

「いっけねえ、寝てみたいだわ。」

「どうしました?」

「ん……いや、なんでもねえ。さっさと飯食いに行くっぜ。んで寝よう」

「ですね」

「エリオにまで心配かけるわけには行かないな。ま、疲れが出たんだろ。早く飯食いに行こう。」

「そしてオレ達はそのまま食堂へ向かった。そこには既に俺ら以外全員そろっていて」

「アキ兄遅いよー!!」

「アキナさん……」

「エリオ君遅いよ」

と。

「悪い悪い！遅くなった」

そついつて席に着く。すでに飯は用意されていて

「……………いっただきまーす!」「……………」

全員でかぶりついた。

つってもなんだろうね、あの夢。へんに覚えてるし。
どこか懐かしい気もしたけど……

まあ、いいか

第4話 アキナの魔法（後書き）

次回デバイス登場、なはず！

あ、魔法のことで分からなかったら言ってください！解説回作りま
す！

でわでわ！まあ今度！

第5話 ある朝の風景（前書き）

閑話休題、みたいな。

正直内容ありません（笑

重大なお知らせ！！

小説の名前を変更！！

ある人気小説と名前が酷似していることが判明！！
ということだ

「ある守護者の話。」

に変更です！！

第5話 ある朝の風景

新暦75年 5月

部隊が成立してすでに二週間が経つ。

部隊のフォワード陣は日々の訓練を欠かさず続け、着々と実力をつけていつている。

「言い残すことは？」

「ああ、一度で良いから高級な肉を食ってみたかった」

約一人を除いて。

「てつめえ！！今日で何回目の遅刻だコラ！アキナ！聞いてんのか！！」

「え？ああ、聞いてますよ。確かどこかの国がTPP加盟について討論してて……」

「何の話だ馬鹿！！！！いい加減目を覚ませ！！！！」

「ああ、はい。……すー」

「アイゼン」

《……Raketenhammer》

ゴキユツ！！！

「ぶじっ！！？」

今日もいい天気である。

訓練場の端っこ

早朝訓練を終えたフォワード陣は訓練後のクールダウンをしているところだ。

今日の訓練はいつもの基礎体力に追加してガジェットとの模擬戦、そして隊長との模擬戦もあったりでかなり大変だった。

一方訓練場の真ん中

大きく身長差がある二人の人間が1on1の模擬戦をやっている。

「今日で何日目だっけ？ ティア？ 4日連続？」

「5日よ」

「アキ兄も飽きないねえ……よく毎日遅刻してヴィータ副隊長との1on1の模擬戦を選ぶよ」

「いや、アキナさんは選んでるんじゃないやなくて不可抗力だから」

この光景を見るのももう5日連続かー。すごいねえ……

アキ兄は現在早朝訓練の遅刻の罰としてヴィータ副隊長との模擬戦をしている。

それもコレで5日連続。

アキ兄はもともと朝起きるのが苦手な人で、昔から朝起きるのが遅かった。起きてもぼーっとしていることが多くて、ギン姉に叩かれることもしばしばだった。既に訓練が開始して2週間。はじめの3日あたりは私達が起こしに行ってたんだけど、私達も連続の早朝訓練に疲れてたつてもあつて起こしにいけなくなってしまうんだ。そのあと1週間ぐらいは何とかアキ兄も自力で起きてきた。もちろんギリギリで。でも、最近は起きることができなくて、毎日のように遅れてきてペナルティとして模擬戦をしている。そのせいかな、ア

キナさんはどんどん上達していて

「それにしてもさ、アキナさん、よくヴィータ副隊長の攻撃捌けるわよね」

「そうですね。僕達だとすぐ墜とされちゃうのに……」

気づけばフォワード陣で段突強いレベルにはなってると思う。
もちろん、もともとアキ兄が一番強かったんだけど最近ずば抜けて
きてる。

「はあ……あたしも遅れてこようかなあ……」

「ティアー!!?何言ってるの!!?」

「そうですねティアナさん!!あんなのに出たら死んじゃいますよ
!!!」

「キユク〜ッ!!!」

キャロとフリードもそう思うよね!?!?
だってほら、

「ラケーテンハンマー!?!?!」

「へぶつ!!!?!」

アキ兄吹っ飛んだよ?

ああ、クソ

ひでえめにあつた

「オイ、アキナ!!コレに懲りたら次は遅刻なんてするんじゃないぞ」

「へーい」

アキナは適当な返事しておく。

って、このやり取りもう5回ぐらいやってるんだよな。

連日の疲れに加えて昨日やったデスクワーク。そのせいで今日も寝れた時間が3時間だ。こんなんじゃないあ遅刻もしちまうんだよな。

ま、正直この模擬戦かなり為になるんだよな。最近プロテクショ

ンの耐久力が上がったのか、ヴィータ副隊長の攻撃も1発程度じゃ壊れなくなってきた。

プロテクションの派生もまた新しく作れそうだし、明日はコレで行くか。って、すでに明日遅れること前提でどうする！俺！！

正直普通の早朝訓練よりハードな気がするぜ……ヴィータ副隊長殺す気で来てるし。

「さーってと、戻るか」

そういつてスバルたちがいる訓練場の端っこに戻ろうと、歩く。前方を見るとスバルが何かを叫んでいる。

「ア……イー……から……出る……！」

「何だー！！！！」

何も聞こえないので、とりあえず叫んでおく。

とはいっても急ぎのようだったら大変なので走って向かう。と、そこで気づく。

ん？なんか焦げ臭くね？

「アキ兄！！デバイスから火が出てる！！！！」

「なんだって！！？」

急いで自分のデバイスを見てみると

「うお！マジで燃えてるし！！」

火花を散らし、黒い煙が昇っている。
思わず体から引き離し、地面に置く。そして次の瞬間には

ボン！！

あらら、木端微塵だわ……
跡形もなく碎け散ってしまった。

「どーすんだこれ？」

第五話

ある朝の風景

ついにイカれました俺のデバイス。
まあかなり古いタイプだから仕方なかったのかも知れねえけど。あ
とついでにティアナとスバルのデバイスもアウト。むしろ自作デバ
イスでよく持った。

とまあそんなことを話したら

「うーん、皆訓練にも慣れてきたし……そろそろ実戦用の新デバ
イスに切り替えかなあ？」

と

「なのはさし。ってことは俺らのデバイス全とつかえっすか？」

「うん。3人のは特に。それ以上無茶させると逆に自分が危ないからなね」

だ、そうで、全員のデバイスを取り替えるらしい。

デバイスって結構高価なものなんだけどな……さすが部隊。

「じゃあ、一旦寮に戻ってシャワーを浴びてから、ロビーに集合しようか」

「「「「「はい！」「」「」「」

と、いうことで俺らは隊舎のほうへ………と思ったんだけど

「なんだあの黒い車………めっちゃカッコエじゃん」

ありえないほどイカした黒いスポーツカーが走ってきた。

やばいな………あれはやべえ………あれに乗ってる奴はセンスがヤバイ。俺と気が合いそうだ」

「ソレはありがとう」

「いえいえ……ってハラオウン隊長!!?」

気づいたらハラオウン隊長が目の前に。なんで!!!?

「といつかありがとうとは?」

「ん?さっきの途中から声に出てたよ?」

マジか!恥ずかしい

「で、これハラオウン隊長の車だったんですね」

「うん。地上での移動手段なんだ」

「すげえなあ……やっぱ、高いンすかね?」

「え?値段……そこまでじゃないよ。これぐらい」

そういつてハラオウン隊長は俺に耳打ちした。

!!!?? 驚愕のお値段

「ね？そんな大した額じゃないでしょ？」

「何言ってるんすか！！？一般社員がどうあがいても買えねー値段じゃないっすか！！」

「え？あれ？」

焦りだすハラオウン隊長。

あんた金銭感覚ずれてるよ、絶対。

「そついえばエリオたちはコレ乗ったことあるのか？」

「はい！一度だけですが」

「どうだった？」

エリオとキャロが「どんなだった？」とか「中は……」とか話してる。これで乗り心地最高、シートふかふかなら俺無理してでも買うわ。ゲンヤさんに金を借りてでも買う。

「ええつとですね……言いにくいんですけど……言わなきゃダメですか？」

えー！！？まさか……そんなに良くないとか？実は外装だけのぼった

くりだったとか!?!?

エリオとキャラはもじもじしている。そんなに……酷いのか？
とか思ってたんだけどな。さすがハラオウン隊長の秘蔵っ子

「えっと、ですね、言いくいんですけど……」

ごくり、と俺はつばを飲む。

「フヘイトさんの、においがしました……」

顔を真っ赤にするエリオたち。
照れ照れなハラウン隊長。

………微笑ましいね。

「そっかそっか。そりゃ最高の車だな」

俺はできる限りの笑顔を送り、二人の頭をなでた。二人は恥ずかしそうにうつむく。

何だこの理想の家庭は。

まあ戦闘に出てたりする時点で普通の家庭じゃないけどね。
それでも、この家庭はいい家庭だわ。

「じゃあ、そろそろロビーに戻ろうか。なのはさん、先ロビーで待ってます」

「あ、うん。シャワー浴びて待ってて!」

「ういっす」

他の皆を見渡す。

「そうね」

「だね」

「そうしましよっ」

「はい!」

「きゅくる〜!」

いや、心も癒されたし。なのはさんはフェイトさんと話してるし。そうして俺らは隊舎の方へ向かった。

そのとき誰か見えた気がするけど……気のせい……だよな?

「あのさ、私は？私もいたんやけど………」

「じゃ、あとでな」

「うん」

隊舎のシャワールームで別れるオレ達。年齢的にはエリオも女子用に入れるがさすがに嫌だそう。キャロはすげえ入れたがってたけど。ってか個室シャワーなのに一緒に入ってどうするつもりだったんだよ。

「さて、今日も疲れたなあ……………」

「今日もって……………まだ早朝訓練だけですよ？しかもアキナさんソレも遅れてきたじゃないですか」

うぐっ

確かに俺はこいつらよりも短い訓練なんだよな。まあヴィータ副隊長とのサシはキツイけどな。確か今日エリオたちは高町隊長とやってるはず。つっても5on2だ。時間かかるうと隙はあるだろ。……………相手はエースオブエースだけだ。

さて、ここから10分は無言になる。理由は簡単だ。体を洗い終わった二人はすぐに更衣室に向かい、ちゃっちゃと着替えた。

「シャワールームってさ、暑いよな」

「はい……………。僕もこついうの苦手なんですよね……………髪が纏わり付くつていうか……………」

「それな」

俺らはどうも暑いところが苦手らしい。つてか男の大半はそうなんじゃないか？蒸れると禿げるって聞いたこともあるし、早く出ておいて損はない。

ん？禿げに気を使つて……………おっさんか俺は！！まだピチピチの1

「だよ!!!」

シャワールームに入ってから出るまで10分か……まあまあの結果だな。更衣室から出るも、さすがに女子勢はまだ出ていないようだ。

「しかたねえ……暇つぶしてるか」

俺はそういうと懐から音楽プレイヤーを出す。

それをエリオは興味津々の顔で見ている。こついつの見たことないのだろうか？

「アキナさん……それ、この間も出してましたけど何なんですか？」

「これか？これはな……って、説明するより実感したほうが早いか。こつちきな」

そついつ俺はエリオをそばに寄せる。
そしてイヤホンの片方を渡した。

「????」

「こつするんだ」

エリオに見せるように耳にあてがう。

まだ電源は入れていないので何も聞こえない。エリオも同じように耳に入れた。

さ、どんな音楽にしようかな？

いきなりRock聞かせてもうるさいだけだし、かといってクラシックなど聞かせるわけにも行かない。ってか俺のやつに入ってない。

まあ、悩んでも仕方ないからとりあえずお気に入りの曲を流す。ロックバンドなはずだけど静かな曲だ。『Trust your Heart』って曲。

「わ!！」

いきなり音が鳴ったのでエリオは驚いたようだ。

「どうだ？音楽が聞こえるだろ？」

「はい。驚きましたけど……これ、いい歌ですね」

「だろ？」

どうやらエリオも気に入ってくれたみたいだ。

「ならコレならどうだ？」

次に選んだのはガチRock。

ドラムの音がかっこいいよな。ただ慣れるまでは耳がいてえ……

驚かせるのが前提なので、音量最大。

音漏れ迷惑もいところな音量。俺もこんな音量めったに出さない……ってぐらいの音量。

そしてポチツと。

ズギヤギヤギヤギヤギヤ！！！！

「うわわわ！！！！ちよ！！！！音量が！！！！」

ですよー

一方女性陣

「まったく、アキナさんは訓練する気あるのかしら？」

「まあまあ。変わりにヴィータ副隊長とやってるじゃん」

「たぶんあっちのほつがきついですよ？」

シャワーを浴びているティアナ、スバル、キャラの三人。
女性というのはなんともシャワーがすきなのか、実はすでに10分
たっていたりする。

そういえば、とキャラは口を開いた。

「アキナさんって、六課に来る前は部隊にいたんですよね？」

「そうだよ。ギン姉とおんなじ部隊だったはず」

「やっぱり、強かったんですかね？」

スバルは「どうだったかなー」と唸っている。
しかし何かを思い出したのか、手をぼんと叩いた。

「そうそう！強いとかそんなレベルじゃないよー！」

「……え？ソレって？」

キャラはきよとんとした顔でスバルの方を向いた。

「強いとかじゃなく、逆！ほとんど失敗してるよー！って、ソレは
初めのほうだけだけど。ギン姉に聞いた話だとね、『与えられた仕
事の7割は失敗するダメ局員』だったらしいよ？」

「ほんとですか！！？」

うそ、ありえないよ？とキヤロは唸る。

現在六課のフォワード陣の中で一番の実力者は、ときかれれば誰もが「アキナ」と答えるほどに強いからだ。もちろん隊長達には遠く及ばないだろうが、アキナの実力はかなりのものだろう。そんな人が「仕事ができないわけがない」、キヤロはそう思っていた。

しかも話を聞いていくと一ヶ月に与えられた任務（新人演習を含む）15個のうち11個は失敗、2個は誰かの助けを持って完了、となっていたらしい。残りの成功した2つの任務はデスクワークと、基礎体力総合訓練だったとか。

キヤロはで呆然としていた。

そんなところに話を聞いていたティアナが補足する。

「でもね、配属されて2ヶ月ぐらいのときに一気に成功するようになったんだって。あたしはそのときメールで「どうしていきなりできるようになったの？」って聞いたんだけど、そしたら『師匠がすごくなった』って帰ってきたの」

「師匠？」

「そ。ソレが誰かは教えてくれなかったけど、『その人のおかげで今の俺がある。』だって。そのあとこっちに異動するまで4ヶ月ぐらいあったんだけど、そのうちの9割を完全成功に収めて、その功績で表彰も何度か。たった半年で一等陸士になったのはアキナさんが始めてらしいわ」

「へえー……すごいなあ……」

「でもどうしていきなりそんなことを？」

「私、アキナさんのような人になりたいんです！皆を守れるような、強い人に！」

スバルとティアナはソレを聞いて少し面食らった顔になり、キヤロは目を輝かせた。そしてその後しばし感傷に浸った。スバル（後日談）によると、ずっとぶつぶついていた、後輩がとても心配になった、だそうだ。

そのころ後ろでは「ティアアキ兄のこと詳しいねえ……」「う、うっさいわよ、普通よ普通！」「顔赤いよあ？」「あ、暑いからよ！」「とか飛び交っていたそうで、スバルは終始ニヤけ、ティアナは顔が赤かった。

三人はそんなことを話しながら、シャワー室から出て行った。更衣室にいる間はなぜか恋バナになったが、乙女の事情ということで割愛。キヤロいわく、ティアナさんが……。

そして更衣室から出た女性たち三人は、出て正面の光景を見てそれぞれつぶやいた。

「キヤロ、あんな風になっちゃダメよ」

「アキ兄はだめだ。あとエリオも」

「……………（泣）」

視線の先にはエアギターを豪快に披露するアキナとエリオの姿があったとかなかったとか。

第5話 ある朝の風景（後書き）

感想くれた方々ー！ありがとうございます！

いろいろ直してきます！今後ともよろしく願いします！

つてかデバイスが出ない！！くそう！！

まあ、ほのぼのが目標でした。

……今度からちゃんとプロット立てて書こうかな？

あと「Side」っていう視点切り替えもやったほうが良いですかね？

あ、あとそろそろキャラ紹介の回を作るかもです。まあそれは流しても構いません。多分そのときにアキナVSヴィータがかかれる気が（笑

でわでわ

次回に！！

感想とか待ってますw。

第6話 ファーストアラート。初陣フォワード陣（前書き）

どもも、こーこーせいです。

なんだかんだでもうファーストアラートです。

あと前話がいろいろひどかったので直します。たぶん。

第6話 ファーストアラート。初陣フォワード陣

「わあ……」

「コレがあたし達の…新デバイス…ですか？」

「すげえな、こりゃ」

「そうです！設計主任私！協力者、なのはさんとフェイトさんとレイジングハートさんとリイン曹長！」

いや、レイジングハートっておかしくね。あれデバイスじゃんよ。今オレ達は六課内のデバイスルームにいる。今回新デバイスをもたらえるということやってきたのだ。その通り、目の前には各自のデバイスがある。

ティアナの前にはカード
スバルの前にはペンダント

大きく変わったのはこの二人かな。

エリオの前には腕時計
キャラの前にはリストのアクセサリ

そして俺の前

これから相棒になるであろうデバイス。ピアスの形をしている。

リイン曹長によると、外見に変化がなくとも中身はほとんど違っています。

エリオとキャロは目が点だった。

「皆が使うことになるのは、六課の前線メンバーとメカニックスタッフの技術と経験を集めた最新型！部隊の目的に合わせて、そして皆の個性に合わせて作られた文句なしの最高の期待です！」

リイン曹長が頭の上で飛び回る。

そして自分のデバイスを引き寄せた。

「この子供達は皆、まだ生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いがこめられてていっぱい時間をかけてやっと完成したです！」

リイン曹長が全員にデバイスを渡す。

……言うタイミングじゃあねえがどうやって動かしてんだろ？

「ただの道具や武器と思わないで、大切に、だけど性能の限界まで前回で使ってほしいです！」

全員がその言葉につなずく。

この中じゃ誰も道具だなんて思ってないだろう。むしろ仲間と思ってるはずだ。仲間をないがしろにしちゃいけないよな。

「この子達もきつとソレを望んでるから」

まあ、どんなに壊れてもシャーリーさんは嬉々して修理するんだろ
うなあ……

まあ、壊す気なんかねえけど。

そんなことをしていると、後ろからなのはさんが

「ごめんごめん、遅くなって」

「なのはさん!」

ライン曹長がすつと寄っていく。

「ナイスタイミングです!ちょうど今から機能説明をしようかと!
」!

「そっか。間に合ってよかった。もう既に使える状態なんだよね?」

ん?この言葉はデバイスの説明が終わったらすぐに訓練って言うの
とですかな?

キツツイわあ……。

第6話

ファーストアラート

さてさて、機能説明が終わったわけですが、驚愕の事実判明。

っと、ソレを言う前にいろいろ説明からだな。

まず俺らのデバイスは機能制限がされてて、訓練や、実力に合わせて解除していくらしい。それがどんな風に換わるかは教えてくれませんでした。まあ、楽しみは取っておいたほうがいいのかも知れねえけど。

ちなみにそれ以外は前と一緒に。ってかむしろ強くなってるらしい。

でなでな、驚愕の事実はこのことから。

隊長、副隊長はデバイスだけじゃなくて自身の体にもリミッターかけてたらしい。そんな状態で俺らの相手してたとか……。

俺ヴィータ副隊長との模擬戦いけんじゃね？とか思ってたけどそんなことはなかった。本気出してなかったよ。

リミッターかける理由は部隊の魔力保有量をあわせる為らしい。部

隊の設立にはある程度の規約があつて、そのなかに魔力の総保有量も入っている。化け物じみた部隊が立ち上がる理由が分かった。ゲンヤさんに渡された資料を見たときおかしいと思つてたけどそーゆーことだったのね。リミッターをかけなきゃいけない部隊なんて前代未聞だろう。

話はシャーリーさんに戻る。

「あと、このデバイスたちは皆の訓練データを元に調整してあるからいきなり使つても違和感ないはずだよ」

「午後の訓練でテストして微調節しようね」

「だつてよ。どうする？俺、どうすんのよ!!」

俺訓練参加してねえじゃん。特に朝。データ取れてんのかね？

「アキナ君はデータが少なかったから……つていうか元のデバイスも壊れちゃったから使いにくいかも。あと、インテリジェントデバイスに切り替えたからそこいらへんも午後の訓練で慣れてね」

今日こそまじめに訓練出ればよかったと思うときは無いね。
ん？そつえば

「なのはさん、俺のデバイスって名前何なんスか？」

「名前……アキナ君のは特に決まってるないんだよね。自分で決めて良いよ？呼びやすい奴にしてあげてね？」

「マジすか」

名前か……どうしよっかなあ……

俺って魔法とかを参考にしなくても使える魔法がほぼ0だし……うーん？

（スバルさん、アキナさんが難しい顔してますよ！助けてあげてください、妹として！！）

（いやいや、エリオ。ここは見守るべきだよ。アキ兄のことだからきつと最高（に面白そう）な名前考えるはずだよ！！）

おーい、そこ、聞こえてるぞコラア

ついでにスバル。副音声も聞こえてる。面白って何だ面白って

つと、いい加減考えるか。

俺自体が弱いからな……せめてこっちだけでも強くしてやろう。

「よっしや！名前『ガードビーツ』にしよう！」

理由？

結局は直感だ。こういふときは直感というものがいい。どんなものも結局はしっくり来るもんだ。気に入らなくなっても自己責任だしな。

(つまらないね、エリオ)

(え？かっこいいと思いましたけど!?)

よし、あとでスバルお仕置きな。エリオ、ありがとう。あとでこの間手に入れた新曲聞かせてやる。つかお前から聞こえてるって。学習しろよ。

つと、そんなことをしてるとなのはさんがやってきた。

「そういえばアキナ君に言いたいことがあったんだ」

「？なんすかね??？」

「今回アキナ君のデバイスには新しく『カートリッジシステム』を搭載してみたの」

「カートリッジシステム……スか」

「うん」

カートリッジシステムというのは圧縮魔力を込めたカートリッジを

ロードすることで、瞬時に爆発的な魔力を得る技術だ。かなり強力ではあるが、体への負担は計り知れない。つてかなんで俺に？

「アキナ君の魔法を全部知ってるわけじゃないんだけど……魔法の性質上、アキナ君は遊撃要員としておこうと思ってるの。だから先頭に出たり、後ろに回ったり大変になるんだけど……」

遊撃、ねえ……
つておい！

「ちよつと待て！！？なんだそのポジション！！？俺そんな大変な場所なんて聞いてねえぞ！！？何で俺が！！？」

その問いにはティアナが答えた。

「アキナさん、今日の訓練参加してませんでしたよね？そのときに決まっただんです」

ポジションって大事だろうが。人のないところで決めるんじゃない。なのはさんは苦笑しつつ、話を続けた。

「でね？いざって時に魔力切れだと大変でしょ？だからつけたの。けどあまり多用するのはダメだよ？体の負担が大きいから………
……私みたいになっちゃう」

ん？最後なんか言ったか？
なのはさんは苦虫をつぶしたような顔だ。カートリッジシステムで何かあったのか？

「まあ、どちらにせよ、無茶はしちゃだめだよ？」

「うす」

でもカートリッジシステムか……いいね。使ってみてえ。
しばらくは体が頑丈なスバルに使うか」

「アキ兄、声に出てる」

「まじか！！？なんか最近こんなの多いなあ……」

「年じゃないの〜？」

「んだとコラ！？」

「ほら、すぐ怒る！！？こつねんきしょーがいだー！！」

スバルの言葉に全員がどつと笑った。
くそぞう。今日の訓練で泣かしてやる。

そんな和やかなムードの中、ひときわ目立つ音と、ランプが点滅。
モニターには「ALERT」の文字。

全員の顔がこわばった。

この音は一級警戒態勢じゃねえか。全員が押し黙る。仕事の匂いだな。

「グリフィス君!」

なのはさんが声を出すとモニターが出てきた。

『はい!教会本部から出動要請です』

『なのは隊長!フェイト隊長!グリフィス君!こちらはやて!』

二つのモニター。

一つはロウラン准尉。

一つは我が部隊長、八神部隊長だ。てかフェイト隊長ってことはハラウン隊長も聞いてるのか。

『状況は?』

……噂をすれば?かな

『教会の調査団が追っていたレリックらしき物が見つかった。場所は、エイリの山岳丘陵地区。目標は、山岳リニアールで移動中』

『移動中って……』

「まさか!」

『そのまさかや、内部に侵入したガジェットのせいで、リニアール』

ルのコントロールが奪われてる。リニアレール車内のガジェットは、最低でも30体。大型や飛行型の未確認のタイプが出るかも知れへん。いきなりハードは初出動や、なのはちゃん、フェイトちゃん、いける?』

『私は、いつでも』

「私も!」

隊長たちは当然かのごとくうなずく。
部隊長の視線は俺らに。

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、アキナ。皆もOKか?』

「……はい!」

「うす!」

初仕事だ。気合入れてかねえと。

『いいお返事や。シフトはA 3、グリフィス君は隊舎での指揮、リインは現場管制!』

「はい」

『なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮』

「うん！」

八神部隊長は一息置いて、言い放つ。

『ほんなら、機動六課フォワード部隊………出動！』

俺らの初仕事は口火を切られた。

第6話 ファーストアラート。初陣フォワード陣（後書き）

と、いうことでデバイスの名前は『ガードビーツ』です

ガードは魔法にかけましたけど、ビーツは割りと適当（笑

デバイスの性格とかは実はまだ何もw

ちゃんと考えて行きます

ファーストアラートが終わったら一回休憩。

キャラ説明入れますね〜

では、また次回。

感想待ってます〜

第7話 星と雷と風（前書き）

分隊名は勝手に命名。

あとまだデバイスの意味はない気がします（わら

では、どぞ

第7話 星と雷と風

出勤命令を受けた俺達は、すぐさま輸送へりに乗り込んだ。フォワード陣は席に座り、正面になのはさんが立つ。早速ミーティングだ。

「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習どおり大丈夫だからね」

「はい！」

「がんばります！」

ティアナとスバルの返事。

「エリオとキャロ、それからフリードもしっかりですよー！」

「はい！」

「きゅく〜っ！」

ちびっ子達の返事。

「危ないときには私やフェイト隊長、リインがフォローするから。おっかなびっくりじゃなくて思いっきりやってみようー！」

「はい」「はい」「はい」

全員の返事。

あれー、俺には個別の確認ないのかい。まあ、返事とかはしたが。

今回、俺は遊撃部隊として動く。コードネームは風。^{エア}
ティアナとスバルは星、^{スターズ}エリオとキャロ、フリードは雷だ。^{ライティング}隊長はそれぞれなのはさんとハラウン隊長。俺には隊長などいないため基本的には自由に動ける。だが判断力が試されるため、今回はかなり緊張している。横を見るとなぜか余裕そうな顔が並んでいた。一人を除いて。

(どうした、キャロ)

俺は小声で話しかけた。

(い、いえ、ごめんなさい。大丈夫です)

んなわけあるか。どう見ても押しつぶされそうな顔だ。エリオとフリードも不安そうな顔になっちまってる。

まあ、本人が大丈夫だというのだから深く付け入ることはできない。しかたないので俺はキャロのことを頭の隅に置きながら今回の任務のシミュレーションをはじめた。

第7話

星と雷と風

ん？気づけばもうポイントじゃねえか。
シミュレーションをしているうちに現場に着いたらしい。まあ、シミュレーションはできたかな。実はシミュレーションというものはとても大事で、コレがあるかないかだけで成果が変わるらしい。俺もそう思うので仕事前は絶対にやっておくのだが、コレをいったのがパチンコを打ちに行く直前のゲンヤさんの言葉だと思つと、何か切ない。

さつき入った

『ガジェット反応、空から！？』

『現地航空観測隊、反応を多数確認！』

という通信によると、空にもガジェットが着ているとのこと。

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を抑える！」

「うっす。なのはさん、お願いします」

どうやらなのはさんは「こ」で降りるらしい。

へりのハッチが開き、風が流れる。

「じゃ、ちょっと出てくるけど。皆もがんばって、ズバツとやつつけちゃおう！」

「」「」「はい！」「」「」

「はい……」

俺らは返事をしたが一人だけ返事が遅れた奴がいた。

無論、キャラだ。まだ不安なのか、顔はこわばり少しうつむいている。

そんなキャラになのはさんは近づく。

「……大丈夫。離れていても、通信で繋がってる。一人じゃないから、ピンチの時は助け合える。キャラの魔法は、皆を助けてあげられる、優しくて強い魔法なんだから」

「あ……」

その言葉でキャラの表情は少し明るくなる。どうやら少し緊張が解けたようだ。

さすがなのはさん。

「じゃあ、私も行くね。現場の判断はティアナとアキナに任せるよ」

「はい！」

「うす！」

「うん！」

それだけいうと、なのはさんは一度だけニコリと笑い、ハッチから飛び降りた。

空中でセットアップし、一気に目標へと向かって行った。

次の瞬間には姿すら見えなくなっていた。

俺達は視線を残ったリイン曹長へと向ける。

リイン曹長は全員の顔を見た後、うなずき、今回の任務の説明を始めた。

「任務は2つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること。そして、レリックを安全に確保すること」

リイン曹長はモニターを起動させ、車両の簡単な見取り図をだした。

「ですから、スターズ分隊とライトニング分隊でガジェットを破壊しながら車両前後から中央へ向かうです。レリックはココ。7両目の重要貨物室。スターズかライトニング、どちらか先に到達した方がレリックを確保するですよ」

「「「「「はい！」「」」」」」

なるほど。挟み撃ちなら逃がす心配もないしな。
ライン曹長は「で、……」といいつつ、身体を白銀の光に包みながら華麗に一回転させる。そして騎士甲冑を身にまとった。

「私も現場に降りて管制を担当するです！」
といった。

さて、一通り話も終わったところなので

「一つ、質問が」

「なんですか？アキナ」

「俺はどうすれば？」

今回の説明のなかで一度も出てこなかったエアー。まさかココでお留守番なんてないよな？

「そうでした！アキナは今回ライトニングについてくださいです！
まだ二人だけでは大変だと思うのでサポートしてあげてくださいよ！」

「なるほど、了解です……と、言うことらしい。よろしく頼むな、二人とも」

「はい！！」

ん。元気だ元気だ。

さて、時間は少し進み、投下ポイントへ到着。

「よし新人共、隊長さん達が空を抑えてくれてるお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか!？」

「「「「「はい!!」「」「」」」」」

全員返事をすると、まずスターズの二人がハッチへ。

「スターズ03、スバル「ナカジマ」」

「スターズ04、ティアナ「ランスター」」

「「行きます!!」「」」

そして躊躇なく空へ躍り出た。

すげえなあいつら。俺初めてのときビビッてセットアップしながら降りたぞ？

「次！ ライトニング！チビども、気をつけてな!!」

「「はい!!」「」」

次はライトニング部隊。

ちびっ子二人がハッチへ進む。が、しかしキャロは不安なのかなかなか飛び降りることができなさそう。それに見かねたエリオがキャ

口に声をかける。

「いっしょに、降りようか」

「……え？」

一瞬驚いた顔をしたキャロの手をエリオが取り

「ライトニング03、エリオ＝モンディアル」

「ライトニング04、キャロ＝ル＝ルシエとフリードリヒ」

「きゅく〜」

「」「」行きます！」「」

外へ身を躍らせた。

あいつら見せ付けてくれるなあ……俺なんか彼女もないのに。

「ラスト！エアー！」

「っすー！」

俺もハッチから飛び降りようとしたが寸前でヴァイス陸曹に止めら

れる

「旦那、どうか新人達のこと頼みます。まだ、不安ばっかだと思っ
んで」

「もちろんっスよ。ただヴァイス陸曹、旦那はやめてくれ。後敬語
も。まだ17っスよ……」

「っは！ソレもそうだな」

さすがに旦那は恥ずかしいよなあ…

っと、ソレはさておいておいて俺は今度こそハッチへ。そして

「 エアー、アキナ！ナカジマ。行きます！」

空へと身を躍らせる。

顔にバシバシ当たる風圧を受けながら、言葉を発する

「ガードビーツ！！セットアップ！！」

《Stand by ready・set up》

降下しながらバリアジャケットを展開。俺の魔力光は緑なので、緑

色の光が体を包む。
そしてそのまま車両へ飛び降りた。

「ふう……遅くなった。エリオ、キャロ、いるか？」

「はい！」

とりあえず全員無事に着地できたらしい。

ここで自分の姿を確認する。

黒コートに黒のズボン。ところどころに赤いラインが入ったデザイン。ガードビーツはピアスとして耳についている。

このなかで特徴的なのは左肩だけ布地がないことか。左肩だけは肩の部分で布が切れていて、そこにはファーがついている。正直、バリアジャケットとは思えない姿だ。まあ、センスは良いが。

ライン曹長によると

「デザインと性能は、各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ。ちよつと、癖はありますが、高性能です」

だとか。

だけどこんな姿の人いたかなあ……。

つと、こんなことをしてる暇はないようだ。前方から流れてくる音から察するに、既に戦闘は始まっているらしい。

「行くぞ！二人とも！」

「はい!!」

中央を目指すとのことなので、俺らは中央へ走っていく。
ところどころがジェットがいたが、難なくこなすことができた。
ところが問題発生。

「なんだあ、こいつは？」

8両目か、そこいらへんで見たことのないガジェットと遭遇。
数本の腕を伸ばし、襲い掛かってきた。

「やべえ！散開!!」

俺らは前後二手に分かれた。
そして襲い来る腕にキャロが反撃。

「フリード！ブラストフレア!!」

「きゅく!!」

フリードを使った魔法だ。
しかしその魔法は腕によって弾き飛ばされてしまう。
しかしその隙を見逃さず、エリオが突進する

「うおりゃああああ!!」

しかし

「堅い!?!」

ガギン!という鈍い音を立ててはじき返されてしまった。

さらに、ガジェットが一度光ったと思うと

「AMF!?!」

発動していた魔法がかき消された。

エリオはストラダでアームの腕を押さえる。しかしその様子は如何にも危うい。子供の力だ。どこまで持つか分からない。ミスると弾き飛ばされて命の危険にもなりえる。

「キャロ!いいか?ここで援護だ。とはいってもこのAMF。絶対に無茶はするなよ!俺はエリオの援護に行く!」

「え、あ、はい!?!」

そういつてエリオの元へ向かった。正直キャロ一人を残すのは避けなかったが、そもいられない状況だ。

「エリオ!無事か!」

俺は自身の魔法でアームを吹き飛ばしながらエリオに呼びかける。どうやらAMF内でも一瞬なら魔法が作動するらしい。発動したプロテクションはすぐに消えてしまったが、エリオの救出には成功した。

「大丈夫です!!」

しかしそんなことをいうのも束の間。

ガジェットは俺らに狙いを定めると、レーザーを発射した。エリオは飛び越えてよけ、俺はプロテクションを作動させつつ何とかよける。

しかし、レーザーの数が多く、よけ切れなかったエリオは地面に転がった。そこに太い腕が迫り来る。一つは何とかガードしたが、

「うわぁ!!」

一つはエリオに当たってしまった。

「エリオ!!……クッ!!」

エリオの救出に行きたいが、こっちも手が離せない。

一つの腕とレーザーを捌ききるので精一杯だった。

その間にもう片方の腕は気絶してしまったエリオの体をつかみ、天

井を突き破る。

まさか……こいつエリオを捨てる気か！？くそ……こっちは手が離せねえし……残っているのは……

「キャロ！！エリオを頼む！！手が離せねえ！気絶してるだけだからすぐに目は覚ます！！！」

キャロに呼びかける。

なんとか投げられる前に回収してほしいところだ

「……っ！！！」

しかしキャロは動けず、成り行きを見守ることしかできなかった。そして

「ああ！！！」

エリオは外へ放り投げられてしまった。列車の軌道上ではないので列車に乗ることなく、無常にも猛スピードで落下していく。ソレを内部から見ていたアキナは、さらに呼びかける。

「キャロ！！今エリオを救えるのはお前だけだ！！！」

「……っ!!」

「自分の力を信じる!!!!」

その言葉を聞き、キャロはエリオを追いかけよう、列車から飛び降りる。

「エリオ君!!!!!!」

アキナはその様子を見て、つぶやく。

「頼むぜ? キャロ。お前の力は誰かを傷つけるものじゃねえ。AMFも弱まったお前なら使えるぜ? 竜魂召還」

そして目の前のガジェットに向かい言い放つ。

· · · · ·
S
h
a
l
l
w
e
D
a
n
c
e
?

第7話 星と雷と風（後書き）

と、いうことですね、中途半端なところでした。

ほんとうは戦闘終わらせたかったけど、無理でした。眠いです。

アキナの服装のイメージはFF7ACのクラウド。

もはやバリアジャケットではないのは秘密です。

では、感想待ってます。

第8話 新しい力(前書き)

今回フルで戦闘!

描写が難しいです(笑)

矛盾点などありましたらよろしくです

第8話 新しい力

S i d e : アキナ

- - - - - S h a l l w e D a n c e ?

その言葉の返事はガジェットによるレーザー攻撃だった。レーザーは的確に急所を狙っていて殺しに来ていることが伺えた。アキナは落ち着いてソレを見極め、体をひねることでよけた。と、同時に冷や汗が頬を伝う。自分の周りにはA M F空間、さらに相手の表面には魔法を防ぎ、とてつもなく堅い特殊装甲だ。とても一人では太刀打ちできないだろう。本来ならこいつを倒して先に進むべきなのだがそれはできないと判断してエリオたちの復帰を待つことにした。

「ガードビーツ！エリオたちとの距離は！？」

《ざっと2 K m半といったところか。まだまだ離され続けていくな。復帰には少なくとも10分はかかるだろう》

「ちっ！もうそこまで離されたか………エリオたちが帰ってくるまで持ちこたえられるか？」

《お前の力量次第だろうな》

だよなあ……

だとしても、このままやられるというのはつまらない。腕の一本ぐらいはつぶしておきたいものだ。

アキナは攻撃に移るべく、ガードビーツに命令する。

「ガードビーツ！座標計算頼めるか！？」

ソレに対し、ガードビーツは

《座標？何をする気だ？》

そう答えた。

第8話
新しい力

アキナは自分の耳を疑う。

どーゆーことだよ。いまこいつ何をするっつったか？

「いや、おまえ……俺の魔法知ってるだろ？座標を指定してそこに攻撃だよ」

《何言つてやがるこのウストラトン力子。こっちはてめえが訓練でてねえからデータが足りねえんだよ》

んなー！！

つてことはこいつまさらか！？何も出来ねえじゃねえかなのはさんの言葉が頭の中で響き渡る

アキナ君はデータが少なかったから……

っていうか元のデバイスも壊れちゃったから使いにくいかも

……

あああああああ！！！しまった！！

俺だからこそ訓練で慣れなきゃなんじゃねえか！！

「つてことは俺が使える魔法は？」

《まあ、実質0だろうな。一応基本になる魔法はすべて入ってる。それとさまざまな戦闘記録。主に隊長たちのものが多い。マイスターからは『今後の訓練で把握していけ』といわれていた》

「……なるほど」

戦闘記録か……それはうれしいな。今後の戦略を立てるのにも役に立つし、いい教材になる。今度全部見るか。つて！そんな場合じゃねえー！！

こうしている間にもガジェットからの攻撃は続く。主にレーザーがきつい。迂闊に近づけないレベルでとんでくる。ソレに対しプロテクションで対処。

「っちー！！ガードビーツ！先にこいつの攻撃を防ぐ！プロテクション張るぞー！！」

《……了解。Guard》

なんで嫌そうなんだよ。

とはいいつつも目の前にシールド上の物を展開。つてかいまこいつなんていった？『ガード』つていわなかったか？後で聞いてみよう。それにしても

「………すげー！ココまででけえの見たことねえ」

張った魔法は車両の横幅分の長さもある。それにして防御力も高いようだ。レーザーが当たってもびくともしない。

《ふん！俺にかかれば当然だ》

偉そうな奴だ。とはいってもこの凄さには感服するものがある。ストレンジデバイスとの違いはコレか。

まあ、これで当分のレーザーは防げるか。AMFも発動しているのだろうか、なぜか消えないし。どちらにせよ、レーザーが厄介なのは変わらない。ならまずはレーザーの発車部分を破壊したほうが得策だろう。そう判断したアキナは発射口の破壊に重点を置くことにした。

「よし！まずレーザーをつぶす。見た限り発射口は中央にある3つの部分だけだ。なんとか破壊したい。何かいい方法はあるか？」

《あるにはある。基本的に発射口というのは物質の出入りが激しいため防御力が低い。簡単に壊れるだろう。だがお前に何がつかえるか分からん。お前はどんな魔法を使うんだ？》

「基本的には防御魔法だ」

《射撃や、魔力による攻撃付加は？》

「できねえな」

《……使えねえな》

「何だったゴルァ！」

なんだろう、こいつとは馬が合わない気がするんだ。

《だが、仕方ない。射撃が使えない、魔力による威力付加も無理、となればお前お得意の防御魔法でいくか》

「……！？どうするんだ！！？」

《やることは簡単だ。だが出来るかどうかはお前次第だな。まあ、お前向きだ》

そういわれ、アキナは目に火を宿す。

そこまでいうならやってやるぜ！！

既にやる気満々、といった具合にアキナはたずねた。

「何をするんだ？」

ソレの返答は

《防御魔法による射撃を行う》

と。

「どづいづことだ？」

《簡単に言えば防御魔法の攻撃変換だ。そろそろこのガードも解けちまうから手短かに説明する。一回で聞けよ》

ガードビーツによると

俺の使う防御魔法で形成した何らかのものを相手にぶつけるらしい。モデルはハラオウン隊長のフォトンランサーらしい。スピードと貫通力・命中時威力が大きく、誘導はできないが、スピードは速い魔法だそうだ。今回使う魔法の絶対条件として魔力による物質の形成が出来ること。それはクリアだ。前にやった模擬訓練で三角錐の物体を作った。大きさも変幻自在だ。

《さっそく第一段階に入る。まず棒状、槍状のものを形成しろ》

「りよ、了解」

早速魔法の形成。

今までも同じようなことをやったことはあったが、作ったことがあるのは簡単な立体。直方体や、三角錐など。おもに三角錐が多かつ

た。今回のように複雑なものは初めてだ。
これは難しいな……頭痛くなってきた……！！って、エリオのスト
ラーダ真似れば良いじゃん。

と、まあなんとか完了。

とはいっても出来たのはなんとも不恰好な槍……のようなもの。作
れたのは6つ。綺麗な直線状のものではなく、明らかにごっこごっし
ていて、太い。それも大きさがばらばらだ。

………魔力の誘導がうまくいかねえ……

《下手糞だな。後は簡単だ。ソレを吹きとばす。もちろん射撃魔法
じゃねえからこつちから後押しする必要がある。……おい、運動量
保存の法則は知ってるな？》

「あ、ああ……」

なんでココで？運動量保存の法則とは『ある系に外部から力が加わ
らないかぎり、その系の運動量の総和は不変であるという物理法則』
だ。

あ？だれだ今コピペだろって言った奴。

例をとれば振り子の実験みたいな奴だ。

5個ぐらい連ねた振り子の一番外側を落とすと反対側の奴が動くつ
て奴。

まあ簡単に言えば一度与えた物体の運動量の合計は ずっと一定で

決して変わらないっつーことだ。
何でこんなことを……

《ソレを使う。いいか？こつからのことを簡単に説明する。》

お前の作った槍型^{ソレ}防御魔法の尻を叩いて思い切り相手にぶっ飛ばせ
！！！！

なるほど。とアキナはにやりと笑う。

アキナは既にセットされている槍方防御魔法の後ろに長方形の防御魔法を生成。0の状態から一気に伸ばし、防御魔法にたたきつけた。すると勢いよく槍型は飛んでいき

ガス！！！！

1本の槍型^{ランス}防御魔法が発射口に当たる。
見事に貫通し、そこからはレーザーが飛ばなくなった。

「なるほど……確かにコレは俺向きかも知れねえ。攻撃魔法が使えなくてもこれなら十分攻撃になるわ」

そういつてアキナは新たに槍型^{ランス}防御魔法を生成。
そして同じよう吹きとばした。

「っはは！いいねいいね！！おい、この魔法、なんていうんだ？」

《名前だと？……そうだな…『ガード・ランス』としよう》

「ランスか。イイネ！かけえじゃねえの！！」

そういつつ更に魔法を形成。

《まったく……調子のいいやつめ……！！魔力反応！チビたちが帰ってくるぜ！あと1分だ！》

マジか！なら早く壊すか。

エリオが来たら本格的に攻撃を仕掛ける！！

アキナは口元にニヤケを残しつつ、ラスト1個になった発射口にめ
がけ、魔法を飛ばした。

Side：アキナ End．

Side：キャラ

『キャラ！！今エリオを救えるのはお前だけだ！！
…自分の力を信じる！！』

その言葉が私を動かした。

部族から追われ、一人だった私。自分の力も制御できず、管理局に引き取られた後もたらい回しにされてきた。でも、やっとできた自分の居場所。ソレを壊すのが怖くて使わなかったこの力。

今いる六課は自分にとって大切な場所だ。ソレが目の前で崩れかけている

目の前には

それを今使わないでいつ使うか！！！！

私はもう、守られるだけじゃない。

「守りたい。優しい人、私に笑いかけてくれる人たちを、自分の力で……守りたい！！！！！！」

キャラは落ちていくエリオの手をとり、自分の元へ引き寄せせる。気

絶してしまっているエリオを胸に抱き、言葉をつむぐ。
周囲を桜色の魔力光があたりを包みこむ。

「フリード。不自由な思いさせてごめん。私、ちゃんと制御するから……！」

「行くよ……！！竜魂召還……！！！」

あたりに強い光が充満する。

そして続けてキャロは唱える。下には巨大な魔方陣。空気の動きで目を覚ましたエリオもその光景に圧倒される。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ……竜魂召喚！」

私の声に答えるように、フリードの咆哮が響く。
魔力光が消えた時、そこには本来の姿になったフリードがいた。

フリードの意識もはっきりしてる。暴走状態じゃない。
無事、召還完了だ。

「ふう……あ！」

無事成功して、安堵した後、下を向くと目を覚ましたエリオがいた。

互に見つめあい、数秒が経過する。

「！……！」「ごめんなさい……！」

「う、うん。こっちこそ……！」

わわわ私の馬鹿……！

何やってるの！？よく考えたらお姫様抱っ……

そこには桜色の空気が広がっていた。

S i d e . . . キ ャ ロ E n d . . .

チィ……これはきついな……

アキナは見事レーザーの発射口を破壊した。

しかし、ソレによって動き出したのは2本の腕。一本一本の攻撃力が高く、一撃当たっただけでもガッツリ削られてしまう。防御魔法で防御しようとも

《おまえ魔法下手すぎだ！一からやり直しやがれ！！》

「んだとゴルア！！これでも師匠に許しはもらってんだよ！！」

《誰だそのへっばこ師匠は！！鍛えなおしてやるわ！！》

どうも魔力構成が悪いらしく魔法構成自体にムラがあるらしい。
撃で破壊されてしまう。
どうするかな……………

！！この魔力！

次の行動に迷っていたとき、後方から頼もしい魔力反応が

「エリオ！キャロ！！無事だったか！」

「アキナさん！！フリード！ブラストレイ！！」

「ファイア！！」

おお！頼もしい！！
にしても、立派じゃねえか白竜

フリードから放たれた巨大な火炎弾は見事にガジェットに直撃。しかし堅い装甲に阻まれてしまう。
アキナはエリオに向かって叫ぶ。

「怪我はないか！！」

「はい！大丈夫です！」

「ならよかった！……早速で悪いが頼んでいいか！あの装甲は砲撃とかじゃ抜けねえ！」

「了解です！僕とストラダが」

「よし。動きは俺が封じる！エリオは必ず当てるよ！！……それとキャラロー！！」

「は、はい……」

キャラロがフリードの上からこつちを見た。

「……よくやった！！」

キャラロは一度驚いた顔をしたが、すぐに笑顔に変わった

「はい！！」

「よし！！キャロはエリオの強化！！いくぞ！！」

「「はい！！」」

全員で目の前のガジエットの殲滅に当たる。
まず動いたのはキャロ。

「我が乞^こつは、清銀の剣つるぎ。若^{わか}き槍^{そう}騎士の刃やいばに、祝福の光を」

《Enchant Field Invade》

「猛^まきその身に、力を与える祈りの光を」

《Boost Up Strike Power》

キャロの両手に桜色の光がともる。
それを確認してアキナが動き出す。

「ガードビーツ！！さっさと終わらせる！力貸せよ！！」

《それに見合う結果を残せよ？》

アキナの周りに緑色の光が。

ガード・ランスの応用型！！

アキナはさつき作ったランス銃型防御魔法を上空に設置。その数30。そして手を上空にかざし、一気に振り下ろす。

「落ちろ！！」

《Guard Fall！！》

地面に向けて一気に打ち出す。
自由落下する銃型ランス防御魔法は大量にガジェットへ落ちる。そのうち半分は本体に当たったり、それたりしたが半分は暴れまわる腕に直撃。見事に列車の天井に縫い付けた。

「エリオ！いまだ！！」

「はい！！」

槍を構えてたっていたエリオはフリードの背中から飛び降りる。それにあわせてキャラ口が魔法を発動

「てやああああっ!!」

「ツインブースト、スラッシュアードストライク!!!」

キャロの魔力がそれを追いかけてストライダーの刃に吸い込まれる。刀身から光が溢れる。見事に列車上部に着地したエリオ。

「一閃必中!」

にガジェットに突進し、その中心にストライダーを突き立てた。

「でりゃあああああっ!!!!!!!!」

そして一気に振りぬき両断。
ガジェットが爆発する。

「ふう………なんとかなったな………エリオ、お疲れ」

「あ、はい!」

「キャロも!よくがんばった!」

キヤロはそれを聞いて少し笑い、息をつく。
肩の力が抜けたようで、安堵しきった顔だ。余裕が出たのかエリオに手を振っている。
そこへ通信が入る。

「ん、任務完了らしい。俺らはこのまま待機。事後処理の引継ぎだつてよ」

と、言ったのは良いが

「フリードの上でなんともつかれきった顔してるし。このまま働かせるのは心が痛むなあ」

フリードの上では談笑しつつもつかれきった顔のエリオとキヤロ。
この空気で働けというのはなんとも心が痛い。

「じゃあ、アキナ君一人でやる？」

「うおー！いつの間」

気づけばそばになのはさんが。

まあ、なのはさんの言うことももっともだし、エリオがんばったしな。仕方ねえ、俺一人でやるか。

「まあ、ちびっ子二人は疲れてるだろうっすから」

「あ、あれ？冗談だったんだけど……まあいいか。私も手伝うから、ちょっと待ってて」

そういつてなのはさんはちびっ子二人のところへ。ってか冗談だったんすか。なんつーか働き損って感じが凄い。

さてまあ、最後の仕事と行きますか！！

俺は張り切って現場へ戻った。

結局引継ぎ、今回の報告書、列車の始末書、損害、フォワード陣の動きなどの書類を作るのに夜までかかってしまい床に就いたのは翌日3時だったりする。

次の日筋肉痛だったのは言っまでもない。

第8話 新しい力（後書き）

以上です

どうでした？まあ、悪くはないかと。でもなんか惹きつけるものがないんですよね…何が足りないんでしょうか？

あと今回Side使ってみました。そのところ含め感想くれるとうれしいです。

第9話 ガードビーツ(前書き)

え、なにこれ、凄い長い。

どゆこと——) 3 (——

ノリノリな結果です(笑)(笑)

あと、そろそろ試験なので更新遅れます……

では、どぞ!

今回は半分ネタ……な、気がします!

携帯で更新したらなんか文構成が謎& a m p・抜けまくりだったので再編集!!

第9話 ガードビーツ

初任務が終わり、翌日。

機能が任務ということもあって早朝訓練と午前の訓練は中止となり、デスクワークが組み込まれた。主にやることは報告書と始末書なれない新人にはキツイかも知れないがコレも通るべき道だと思う。俺は昨日のうちに終わらせてしまったのでやらなくていい。まあ、その分昨日の睡眠時間は極端に少ないのだが。

さて、俺はというとこれからガードビーツの元へ向かうところだ。任務の後デバイスの微調整として回収された各デバイス。それを取りに行く。

まあ、俺の目的は別。その先にある。

昨日の戦闘中にいったガードビーツの言葉

Guard

という単語だ。

俺が今までプロテクションとして使っていた魔法をガードビーツは『ガード』といった。これはどういうことか、と疑問に思ったのだ。その答えを知っているのはガードビーツだけなので、それを聞きに行かなくてはならない。

たいした問題ではないのかもしれないが、気になるものは気になる。第一、従来の魔法の中で『防御魔法での攻撃』など例外だった。そんなもの思いつくはずがない。それをガードビーツはいとも簡単にやってのけた。

このようなことから考察すると、実はガードビーツは凄いのではないかと思ってしまう。そんなことがあり、デバイスルームへ。今後の訓練の支障になるのも嫌だし、面倒なことは早く処理しておきたかった。

第九話

ガードビーツ

「ということでした」

「指示文字使わない。意味分からないから、それ」

意味がわからないだと？訓練足りねえんじゃねえか？

「いいからココに来た意味を説明して。まだ調整中なんだから」

シャーリーさんに怒られちゃったよ畜生。

ということと事情説明。

俺がデバイスルームに来たとき、そこにいたシャーリーさんは嬉々した顔をしてデバイスの調整をしていた。正直怖かった。うん。

「で？そのことを確認するために来たって事？」

「そーです」

「暇なら新人達の子と手伝ってあげればいいのに……それにデバイスは昼休みに返すっていつてあったんだからそこで良いじゃない」

「午後は訓練つすよ。そんな暇ありません」

「……調整中なんだから。少しだけだよ？」

「ういっい。あざーす」

と、いうことで帰ってきたガードビーツ。もらった当時の用に綺麗に輝いてる。

早速起動する。

《ああ？誰だよクソ野郎。いい気持ちに寝てたのによお……》

欠伸をする、様な声のガードビーツ。明らかに不機嫌。

ってかデバイスって欠伸するのかよ。寝るのかよ。

つと、こんなことしてる場合じゃないな。さつさと聞かねえと。時間迫ってるんだった。

「悪いな、起こしちまって。お前にどうしても聞きてえことがあつてな」

《んだよ、アキナか》

なんだとはなんだとは。こんな俺でもお前の主人なんだけど。

「聞きてえ事は二つある。まず一つ、昨日の戦闘のことだ」

《昨日？何かあったか？》

「お前、俺が使おうとした防御魔法のこと、『シールド』とか『プロテクション』じゃなくて『ガード』って呼んだろ？」

《そうだったか？》

………なんで覚えてねえんだクソAIが。戦闘記録は残ってるだろうが。

アキナは多少イラつくが咳払いをして落ち着かせ、再び聞きにかか

る。「あれ、どういうことなんだ？」

そう、聞いたらガードビーツは

《知らん》

と。

「いせ、どじいじいじいだよ」

《どういつも何も知らないんだから仕方がない。》

どーゆーことだ！？ガードビーツ自体が言った言葉なのに知らない！？

そのことを補足するように、ガードビーツ眠そつな言葉で言う。

《第一魔法のつてのはこつちが決めるもんじゃねえ。ユーザー側が設定するものだ。『ガード』と言ったことは覚えていても、言葉知識は俺の管轄じゃねえってことだ》

その言葉にうなづくアキナ。

確かにそれなら納得がいくな……

《あとひとつ。お前の魔法、決して『プロテクション』や『シールド』じゃねえからな。登録されたどの魔法パターンにも一致しなかった。防御魔法の一部であるのは変わりねえが……。だからお前の魔法は『ガード』なんだろうよ。で、聞きてえ事はそれだけか？なら俺は寝るぞ？疲れてんだよ》

そついうとガードビーツは待機状態に戻ろつとする。

「はあ！？待て待て、まだ聞きてえことが……」

その言葉も時すでに遅し。ガードビーツは完全に待機状態に入ってしまった。

つてかデバイスが寝るの？何このAI？

とか思っていたら、向こうからシャーリーさんが。

「アキナ君、メンテナンスするから持ってきて〜」

と。

どうやら時間切れらしい。

仕方がないのでシャーリーさんのメンテナンスを待つことにした。とはいっても暇だ。

「メンテナンス、みてていいツスか？」

「……見ても面白くないよ？」

丁度ガードビーツの順番だったのでメンテナンスを見ることに。シャーリーさんの邪魔になら無いように後ろから覗き込んだ。

俺の身長ってわりと大きい方だから覗くぐらいならよゆー。ってかシャンプーのいい匂いがくすぐったい。

「あの……アキナ君？ちょっと近いかな……その、息が……」

ん、しまった。正直に言うとなんか女性と関わるのがスバルとギンガぐらいだったから距離感が分からねえ。

「ん、すみません」

俺は一步だけ下がり、再び見守る。

そして見て驚愕。
すげえな。

モニター上では膨大数字が流れている。俺はそれを追うのに精一杯、
どこるか追いつかないのだが、シャーリーさんはそれを見つつ何か
を打ち込む。

恐るべき情報処理能力。

感心しつつも再びモニターに目を戻す。

そこに表示されているのは赤い

《閲覧不可》

の文字。

「????シャーリーさん、これって?」

「うん。私にも分からないんだけどね。誰にも開けない謎のデータ
だよ」

分からないって……

「どうやって開くんすかねえ?」

「分からない。けど、なぜか分からないけど、この間見た時よりセ
キュリティが一つ外れてるの」

なぬ？どういうことだ？

この前と言うのは恐らく初任務前だ。仕事熱心な人だ。大事な時の前にメンテナンスをしないわけがない。そのときよりセキュリティが弱いと？何があった？たった一日だぞ？……なんだろう。だんだん自分のデバイスがわからなくなってきた。

「なあ、シャーリーさん。ガードビーツって“何なん”ですか？俺はただのデバイスには思えないんです。なんか、こう、人間味溢れるっつーか……」

なんというか。

言葉にはできないが、ただのデバイスじゃない気がする。

シャーリーさんもそれに頷く。

「うん。ガードビーツは確かに他のデバイスとは違うよ。実はこの子誰かが使ってたものなんだ。だけど性能も、基本構造も普通のは変わらない。だから特別、ではないかな」

「誰かが使ってたってのは？」

「誰が使ってたかはわからない。これは魔法管理局から貰ったの。なんで渡されたかは分からないけど、性能もバージョンも申し分無かったよ」

へえ……と、俺は洩らした。

それを俺が使っているのは偶然か否か。まあ、偶然に決まってるんだけどね。

作業が終わったのか、こちらに振り返るシャーリーさん。

この人今まで仕事してたからね。それで質問に答えてくれてたんだよ？すげえよな。

「そつえばさ、この子って口悪いでしょ」

「まあ、はい」

そこまでではないけどね

「実はね、この子出生不明なの。ソレに前の主人にも見放されちゃつて。だからかな、この子虚勢張ってるんだと思う」

へえ……こいつもなのか
なんか、くるな

「アキナ君ならさ、その気持ちわかんと思うんだ。だからさ、この子はいつまでも、大切に使うてくれないかな？」

そんなシャーリーさんの言葉に、俺は頷き

「もちろんっすよ。こんないいデバイス、他にねえっすから」と言った。

いいデバイスってのも本当だけど、実は同情が多いかな。

俺がそういうと、シャーリーさんはニコリと微笑んだ。

「うん！じゃあ、よろしくね！」

といい、ガードビーツを渡してきた。

なんとなく俺達の間で何か繋がった気がした。

その後、デバイスルーム退場際にシャーリーさんはつけ加えるように言う

「実はアキナ君の口の悪さも虚勢^{虚勢}？」

「んな！！」

そんなんじゃないえッスから！！！！

はいはいどうも。

部屋で完全にぐだってるアキナです。今日の訓練？いつも通りやば

かった。
折角だから思い返してみるか。

Training 1 『基礎体力』

「まずは基本から！全員基礎体力作り行くよ！！」

「「「「はい！」「」「」「」

午後、飯の後に休憩を取って現在時刻1時。そろそろ日差しも強くなってきた暑くなってくる季節。とはいえどまだそこまでではなく動きやすい日だった。

なのはさんの訓練はいつもハード。その理由は分かると思う。

「じゃあまずこの訓練場軽く5週行って来ようか！！」

この人、わりと限度を知らない。

この訓練場、外周を走ると一周でいたい3Kmある。それを軽く五週と。

「ビリ二人は2週追加ね！では、はじめ！！」

とはいっても訓練。サボることなど言語道断。ということランニング開始。

そしてここで馬鹿が二人

「エリオ！！勝負だよ！！」

「負けませんよ、スバルさん！！」

開始と同時に超ダッシュ。2分後には見えなくなる。

あんな調子で走ってもつのかね。

「なあ、ティアナ。あいつらどう思う？俺、途中でバテるに今日のメインディッシュ」

「奇遇ですね。あたしも同じですよ。キャラは？」

「あ、わたしもです」

呆れ顔のティアナと苦笑するキャラ。

全員一緒では賭けにならねえじゃねえか。まあ、訓練は賭けるものじゃねえんだけどな。

そして結局予想通り。
3週目にはいるころ

「バカスバルー先行くぞー」

「あんたも馬鹿ねえ……………」

「あ、待つてよ、アキ兄、ティアクー!!」

「う、ごめんね、エリオ君……………」

「う、ううん……………」

完全にへばってた。

オレ達三人は馬鹿二人を追い越し普通にゴール。
とはいっても15Kmはさすがにキツかった。

「キャラ、走れるようになったわね。最初のほうは2Km無理だったのに……………」

「さすがに伸びますよ、あれだけやってれば……………」

キャラも走れるようになったし、いい訓練ではあるんだよね。足腰

が鍛えられる。
そして15分後

「ぜえ、ぜえ……」

「はあ、はあ……」

ペナルティを走り終わった二人が到着。
それと同時に二人とも地面へ仰向けに寝転がった。
そしてなのはさんが上から降りてくる。

「はい、皆おつかれー！10分休憩して次行くよ」

肩で息する二人。

……どうせだからちよつと意地悪。

「なのはさーん。エリオくんなのはさんのパンツを見てマース」

まあ、隊長達ガード緩すぎるんで。

「ええ！ちよつとアキナさん」

エリオの抵抗もむなしく

「エリオ、もうちょっと自重しようね?」

軽く怒り顔のなのはさん。顔は笑ってるけど目が笑ってねえ……こわ…

「エリオ君……」

エリオを残念な目で見えるキャラ。
そしてとどめ

「エリオ1週追加!すぐ行く!!」

これによってエリオのライフは0に。

「誤解ですよー!!」

ふはは、なんかすつきり!

「アキナ君は3週追加ね?」

アウチ!!

あ、ちなみにピンクレースの白でした。

Training 2 『Up & Down』

今度の訓練はビルの壁を使つてのぼつてり降りたり。これは基本的に災害救助のときに良く見ると思う。でもコレわりと体力、筋力使うんだ。それも全身の。まあ、頭使えばつかねえんだけどな。

「じゃあ、いつもどおりチーム戦ね」

ということでチーム戦へ。まあ何回かやってるから平気だ。
今回は

「よりによつてお前かスバル」

「えへへ。でもあたしは災害救助隊志望だったからコレ得意だよ」
「！」

本当かねえ……

「じゃあいい？ルールの確認！壁に設置されてるボタンをすべて押した後ビルの頂上へ。頂上のボタン押してから今度はDownだよ。余ってる人は指示してね。じゃあ、レディー、ゴー！」

ということを開始。
何やってるか分からない人いたら、TV番組『V S ハリケーン』を見る。まあ、分かるでしょ。

壁に設置されているボタンは各20。それをすべて押して戻ってくる。人数が多いチームは一人15個押せばOK。あ、もちろん魔法使用可能。

現在の状況

第一選手

スバル vs エリオ

スバル 6 / 20 に対し エリオ 15 / 20
ボロ負けじゃねえか。

「クソスバル！！周りを見る！そこはもう押してあるじゃねえか！！」

「バカからクソに変わった！！？」

んなこと気にしてンじゃねえよ。まあ、エリオはソニックムーヴで動いてるがスバルは一個一個やってるつてのもあるが。
ほら、エリオ終わっちゃったじゃねえか次はキャロみいだ。

「相手はキャロだぞー！ここで抜け！！」

横のほうで私の扱いひどくないですか!?!?とキャラの声が聞こえたがするー。まあ、問題ない。そしてしばらくした頃

「アキ、兄、チェンジ……」

死にかけてスバルが降りてきた。遅い!

「ほら、むこうはあんなに……!!なに!?!?」

なぜキャラなのにあんなに早い!
と、ここで気づく

「竜魂召還か……!!」

キャラはフリードに乗って動いていた。そりゃはええわ。
そして

「ティアナさんチェンジです」

「よし!」

ティアナにチェンジ。

俺Vsティアナ

二人は一度目線を合わせると同時に走り出した。

アキナは自身の魔法、『ガード』で足場を作り、一つ一つ押していく。
それに対しティアナは自分のデバイス、クロスミラージュから伸ばした魔力のワイヤーによってボタンの位置まで移動してボタンを押している。

外から見ると早さは互角。

そしてラスト

頂上のボタンを

「ふっ！！」

「はぁ！！」

同時に押した。

「はい、終了！結果はドローだね」

ということ引き分け。

これでペナルティはないだろ、と思ってたが

「両チーム、腹筋と腕立て100ずつ！」

なのはさんは容赦なかった。

Training 3 『シュートイベーション』

今日の締め！！

何時も通りだ。ルールは簡単。なのはさんに1撃入れるか、5分間逃げ切れば勝ち。一人でもヒットされれば最初から、という簡単なルール。

説明するのは簡単だが、正直かなりきつい。なのはさんの誘導弾「アクセルシューター」は生き物のように襲い掛かってくる。そして今までの疲労。15分逃げ切るのはまず無理。

そして作戦タイム。

「今のあたし達がなのはさんの攻撃を裁ききる自信は？」

「ない！！！」

「同じく！！！」

「じゃ、なんとか一発入れよう」

うん。なんとも簡単な作戦。ってかこの会話前にも聞いたな――

「いい？スバルとエリオが中心となってアタック。あたしが援護」

「俺とキャロがフルバックとして入ろう。まあ、隙があつたら入れるぞ」

俺は今回戦闘よりもフルバック。

まあ、もともと防御系だし。正直俺の魔法が分からなくなってきたからな。

、とそんなことを考えているとティアナから全員に念話が。

……なるほど。いい考えじゃねえか。

あ、ならいつこいい？やりたい魔法があるんだ。
ということで作戦決定。うまくいけばいいね。

「じゃあいい？レディー、ゴー！！」

早速開始。なのはさんの誘導弾が襲いかかってっくる

「2分以内に決めるわよ！全員回避！！」

「」「」「了解！」「」「」

「うしー！！」

全員でよける。

スバルとエリオが連携して攻撃。ティアナが追尾する誘導弾を落とすし、キャロが威力強化など。そして俺はというと

「146、147、148……くそ!!」

上空にて足場を作ってランス作成中。
さっききたティアナの作戦はこうだ

まずエリオとスバルでなのはさんの周りをかく乱。エリオたちには当たらないよう、ティアナが援護。キャロはそのまま威力強化。主にティアナの弾等をだ。なのはさんの誘導弾を一撃で落とすためだ。そして俺は上空にてランスをセット。セットでき次第すべてを落とす。つまり完璧な罠。

150個できたところで全員に念話を送る

(準備完了!下に戻る!作戦開始だゴラァ!!)

((((了解!)))

俺はしたに戻り、まずエリオとスバルに合流。

「まとまってると一気にやられちゃうよ」

なのはさんの言う通りだ。だがこれも作戦。二人は俺の護衛。1
50個のランスを一気に落とすのは少々時間がかかる。

まあ、二人ががんばってくれたので

「完了!!!全員離れる!!!」

全員で散開。と同時に魔法発動。

「ガード・フォール!!!」

今回ガードビーツの補助なしで魔法を構成したので、ガードビーツ
は他の事をできる。すなわち

「ガードビーツ!!!追尾!」

《任せな!!!》

全てを誘導することも可能。しかしさすがに150は多いか。三分
の一は外れてる。しかし目眩ましには十分だ。ソレに気づいたなの
はさんは一瞬驚き、すぐに対処に当たる。
そしてそこへ

「エリオ、いまだ!!!」

「はい！」

「キヤロは魔力強化よ！」

「はい！」

エリオが突撃。

もちろん後ろから。

しかし何故か気づいたなのはさんがこちらをむいて……

粉塵が去った後、残っていたのは……

ん、回想終わり。

結果？エリオがんばった。なんとか入って終了。

なのはさんの言葉は

「皆、強くなったね…私もそろそろ本気でかからなきゃね！」

なんと言うか、死刑宣告だった。

その後俺らは端から見たら異常な量の飯を食って、部屋に帰って行

った。

ついでに俺はガードビーツと新魔法を考えた。まあ、ただの派生
だけどさ。いつか見せようと思う。

それよりも今は眠い。だからおやすみ。

どうか早朝練習に間に合うことを！！

第9話 ガードビーツ（後書き）

どうでした？戦闘描写むずかしい…。まあ、このくらいが限界です
…伸ばしていきたい…

本当は新魔法入れるはずだったんだけど……無理でした（笑）（笑）

次回……いつかな？わかりませんが、よろしくおねがいます。

感想待っています*

第10話 同じ出身なら皆兄弟(前書き)

更新遅くなりました。

とかいいつつこのクオリティの低さです。温かい目で見守ってくださいと幸いです。

今回は、、、ネタを織り交ぜようとして失敗した気が……

ま、まあ！どぞー！

あ、最後に一つアンケートっす。(あとがきにて)

第10話 同じ出身なら皆兄弟

初任務も終え、基礎の基礎が終わった俺達は次の段階へ進んだ。

今日からそれぞれのポジションにあった練習メニューが組まれる。

今日の組み合わせはティアナとなのはさん、スバルとヴェータ副隊長、ちびっ子達とハラオウン隊長。

主にスバルのほうからだが怒号や何かを壊したような重低音が。ティアナのほうではいろいろな光が。（おそらくなのはさんの誘導弾だろう）ちびっ子達のほうは数多くのビットがある。皆、それぞれの課題をこなそうと、必死になって訓練をしている。

ところで、俺はというと、なぜか訓練場の中央を陣取り、ある人と対峙している。その誰かとは……ってなんとなく察しは着いてると思う

「なんで俺の相手があなたなんすか？シグナム副隊長」

俺の中で緊急信号レッドシグナルを叫ばせ続ける人。シグナム副隊長。いつもは訓練に参加しないが、実力は凄いらしい。ガードビーツに入っていたデータを見るとなのはさんと普通に殺りあっていた。こんな人と何を訓練しろというのか。

「理由は簡単だ。まず一つ、今日はヴェータが使えない」

まあ、スバルのほうにいますしね

「二つ、お前の魔法は多彩な防御魔法だと聞く。ならば様々なシチュエーションに遭遇しておくべきだ」

たしかに。いつもなのはさん、ヴィータ副隊長とかだとその攻撃タイプにしか対応できなくなるからな。

もしいつも訓練しているタイプじゃない人にあつたら速攻でやられてしまう可能性がある。まあ、俺は遊撃だから状況判断してから突撃するけどね。

「そして3つ」

まだあるのか、そう思いつつ俺は耳を傾けた。

シグナム副隊長は自身の剣、レヴァンティンを引き抜きつつ、言った

「お前と殺りあってみたかったのだな」

最後エ……

ってか俺とやりあってどうするのよ。俺はただの魔導士よ？ただの剣の錆びにしかない気がするんだ。

「ルールは簡単だ。私の攻撃を5分、すべて回避するか私に一撃入れる」

すべて回避!!？

たしかシグナム副隊長ってスピードタイプだったよな!？まだ目視できるのはさん誘導弾を防ぐのも精一杯なのに目視できない攻撃を防げと!？無理だろう!？

「では、いくぞ!!はっ!!」

ぬおお!!いきなり突撃かよ!!

俺はとつさの判断?というよりは半分無意識でガードを発動。そして横に転がる。すぐにガードは音を立てて崩れ去り、さっきまで俺がいた場所にいくつもの剣筋が。いったいどんな速さで剣を繰り出しているのか……想像もしたくない。

「ほお……やるではないか。なら、少し本気を出していこう」

本気じゃねえのか!!？

つくそ……これじゃあ5分避けるどころか次すら危うい!!仕方ねえ!!一撃当てるしかない!!

俺はシグナム副隊長の突撃をあえて真正面から受ける。ただし、ガードはプロテクションのような平面ではなく、自分を覆うように展開。しかもところどころ棘棘している。これなら攻撃もできないはずだ。すこしでも当たってしまえば俺が攻撃を当てたことになる。訓練終了に！作戦勝ち！ってやつだな。

「ふはは！！秘儀！ハリネズミ！！これで迂闊には攻撃できな……」

「迂闊には、何だって？」

なんとという。なんか遠距離から攻撃してきた。何あれ。剣が鞭に変わった！！？

いや、あれは過去の戦闘データで見たぞ？シユランゲフォルムって奴だ。ってことは、遠距離も無理だな……

……そうだ！この間考えた魔法を使えば……！！ふふふ、勝機が見えてきた！！

「いいぜ、シグナムさん、お前が俺を倒すっていうなら、俺はその幻想を……」

「しゃべっていていいのか？」

「うわぁ……」

くそう、台詞ぐらい言わせるよ。

まあ、いいや。シグナム副隊長がこっちにきたんだ。コレを使わない手はない!!

「ガードビーツ!!ガード展開!最大防御!」

《任せな》

俺はガードビーツに命令しガードを展開。

しかも簡単に破られないよう、4重構成の盾だ。

「!!!??」

シグナム副隊長も驚いている。まさか防がれるなんて思ってなかったんだろう。

そしてこの隙見逃す訳がない!どんな玄人だろうと攻撃した後は少しの間硬直しちまう。それが狙い目だ。超近距離状態でのラッキーチャンス!!

「俺らの新魔法!!ガード・アタックだ!」

《Guard Attack!!》

そして俺は魔法を発動。

今回は攻撃力などよりも出の早い攻撃が必要だ。

話は変わるが車と人が競争したらどちらが勝つか知っているだろうか？

答えは人だ。もちろんそれは条件付で、はじめの5mのみ。

つまり、人体というのは0 - 1000 - 0のスピードを出すことが可能。すなわちここでできる最速の攻撃、それは自らの体による攻撃だ。

ガード・アタックは拳の出す速度にあわせてガードを出現させ、相手に物理攻撃を与える魔法。もちろん距離は関係ない。なぜならガードを発動させる場所をずらすだけだからだ。だが、発動させる場所を瞬時に特定するのは難しい。だから今回は至近距離まで持ち込んだ。

そしてこの際は絶好のチャンスなのだ。

よし、説明ご苦労。おk？魔法の説明。分かったかな？え？分からない！？まあいいや！！

「コレで終わりっすよ！！」

俺はシグナム副隊長へ拳を炸裂させる。そして同時にガードが飛び出しシグナム副隊長の体に……！！

そう思われたのだが

「ふむ。悪くない。少し焦ったがな。だが、遅い!!」

なぜか避けられて

「ぐへっ!!!!?」

鞘で頭に一撃入れられて昏倒しました。
顔面真っ暗。何が起きたし。

第11話

同じ出身なら皆兄弟

マジ緊急事態。

目が覚めたらなんか誰かの背中の上だった。

シグナム副隊長の攻撃でガツ！！された俺は見事に意識を失ってた。んで、気づいたらコレだわ。

揺れてるなー、から始まって、あつたかいなー、つてきて、あれ？見たいな。

いやね、おぶられること自体は緊急事態でもなんでもないよ。ただどさ

なんか、こつ、柔らかいんだな。うん。

後匂いとか。訓練後だから多少汗の匂いはあるけど、男くさくない。うん。

匂いフェチなんかじゃないぞ！！？多分にしても、誰なんだろうね。俺を持ってる力持ちは。

ま、まさか！！

なのはさんか！！？

もしそうだったら死ぬわ。うん。至福ってこういうことだよ。つてかそれ以外ありえなくね？ティアナ力ないしキャロちっさいし、エリオ男だし、シグナム副たいちよー固そうだし。

え？スバル？妹に担がれて何が嬉しいか。

え？ヴィータ副隊長？あの人はありえないでしょ（笑）

もしやったら俺引きさずっちゃうじゃん」

「んだと？コラ」

……………あれ？

「アキ兄、途中から声でてるから。あとごめんね、あたしで。だからココでおしまいだよ」

あだっ！！落とされた！っつか持ってたのお前かスバル！
とか、言おうとしたのだが、そこに見えたのは鬼の形相とスバルと
ヴィータ副隊長。
あ、コレ死んだわ。

「星になりやがれ。アイゼン！」

「少し頭冷やそうか。マツハキヤリバー！」

ちよ！スバル！それお前の台詞じゃな……………プペッ！

結局目が覚めたのは10分後、誰もいない道路だった。

「なるほど……スバルさんのお父さんとお姉さんも陸士部隊の方なんですな」

「うん。八神部隊長も一時期……父さんの部隊で研修してたんだって」

「へえ……」

あれから俺達は隊舎に戻り食事をとることに。テーブルにはありえないほどの量のスパゲティが出ている。見ているだけでお腹一杯になりそうだ。たしかこの皿には8人前？だったか？6だったか？がのっているらしい。食いきれるのか？コレ。

「まあ、そのへんはアキ兄のほうが詳しいかな……アキ兄も陸士部隊出身だし」

オイコラ、話し振るなよ。飯の処理で精一杯なんだからさ。

「ちなみにギンガ……まあスバルの姉貴は俺と同年な」

「そうなんですか？……あれ？じゃあアキナさんがお兄さん？ギンガさんがお姉さん？」

「ん……一回そのことでケンカしたけど……どっちだったかなあ……」

まあ、わりとどうでもいい事って忘れるよね。前に一度だけ思いっきりケンカになって殴り合いしたな……
結局ギンガのパンチで俺がKOしたけど。

「しかし、うちの部隊って関係者つながり多いですよ。隊長たちは幼馴染同士だし」

「ああ、確か管理外世界の97番だったな。あそこってリンカーコア持ってる奴少ねえんだけどな。おかしなこともあるもんだわ。あんな化けも……神クラスの親って……」

想像するだけでゾツとするわ……
実は魔力の塊から生まれましたーみたい。あ、でもありえるな。
あの人たち魔力量おかしいし。どんなところなのか………気になる。

「97番っていえば、あたしのお父さんのご先祖様がいた世界なんですよ」

スバルがさらにスパゲティを盛りながら言った。
軽く2人前は乗せてると思う。そしてさり気にエリオにも乗せてるし。

「そつえば、響きとかなんとなく似てますよね。なのはさんたちと」

「まあ、そつちの世界にはあたしもお父さんも行ったことないからよく分からないんだけどね」

「へえ……」

スバルがついに2杯目を完食！！3杯目にいった！！
つてこいつどんだけ食うんだよ。もう3人分ぐらい入ったんじゃないか？

「あれ？そういえばエリオってどこ出身だったか」

「あ、僕は本局育ちなんで」

……あれ？なんで空気が冷たくなった？スバルとエリオ以外の顔が険しいぞ……おい。

俺全然話聞いてなかったからわからねえんだけど……まあ、とりま黙っておこう。

「管理局本局？住宅エリアってこと？」

あゝ……話が読めた。

クソ、バカスバルが。資料ぐらい読んどけよ……。いくらハラオウ

ン隊長が保護者でも年齢おかしいだろうが。

「本局の、特別保護施設です。8歳までそこにいました」

「あつ……」

いまさらそんな顔してもおせえよスバル。
ティアナの視線が厳しいね……たぶん念話かなんかで怒られてるんだろ。まあ、十分に反省せい。

「あ、あの、気にしないでください」

ほら、エリオが気イ使っちゃまったじゃねえか。

「やさしくしてもらってましたし、全然、幸せに暮らしてましたんで」

……なんといいですか。

エリオ君大人々！！目の前にいる青い髪の子に教えてやりたいわ。
つて、そういえば特別保護施設っていったよな？
そこってもしかして……

「なあ、エリオ。特別保護施設ってあれか？第8区にあるあの施設」

「え？なんで知ってるんですか？アキナさん」

おお。やっぱりか。

「俺もそこ出身なんだわ」

「……ええええ！！？」「」

いや、スバル。何でお前まで驚いてるし。

実は俺も特別保護施設にいたことがある。

ゲンヤさんに引き取られるまで、身寄りどころか、出生も、名前も分からなかった俺は保護施設に入れてもらっていた。そこにいるのは親が死んでしまった子供や、実験に使われそうなところを助けてもらった子供など。多くは6〜8歳の子供だった。その中で11歳だった俺は年長者としてよくリーダーとして扱われていた。そこにいた先生達は皆いい人ばかりで、とても親切にしてくれた。親がない俺らの親代わり、というものだな。

ちなみに俺の『アキナ』つつう名前はここで付けてもらった。そのときたまたまいた人……まあ、後の俺の師匠なんだが、その人につけてもらった。俺が引き取られたのが10月ごろの紅葉が綺麗な時期で、管理外世界97番ではそのような季節を『秋』と呼ぶらしい。なんとも、飯はうまいわ過ごしやすいわで人気の季節だとか。その先生は管理外世界97番に行ったことがあるらしく、あまりに感動したから、ということとそれを由来に名前をつけてくれたらしい。

ああ、思い出したら懐かしくなってきた。

「ってことは俺はエリオの兄貴に当たるわけか」

「ですね」

俺の言葉にエリオがうなずいた。うん。懐かしいな、このやり取り。

「え？どういうこと？」

ん？スバルにこの話したことなかったか？

「俺らがいた場所ではな？そこにいる人全員が『兄弟』なんだよ。もちろん卒業生含めてな。年上は年下の面倒を見て、年下は年上をサポートするってな」

「へえ……すごいねえ……」

だから気づけば俺の弟、妹は50人ぐらい超えるんじゃないか？もちろん兄貴達も多いけど。

「今度行ってみようかなあ……久しぶりに会いてえし」

「いいですね！ソレ！僕も行きたいです！」

「おお！なら今度行くか！」

「はい！アキナ兄さん！」

さっそく使うエリオ。

なんかちよっぴりうれしくなった。ってかそのときの事思い出すわ。

「あ、エリオ君ずるい！私もおにいちゃんほしい！」

いや、キャラは何を言ってるし。

陸士108部隊 隊舎

現在、はやてがある頼みをしにここへきていた。無論、お願いをするのは自分と師弟関係にある人だったので願いはすんなり受け入れてもらえた。

思った以上に早く用事が終わってしまったので、どうせなら、と長居させてもらっていた。

「で？八神、うちの坊主はどうだ？」

「坊主……アキナ君のことですか？」

「ああ、そつだ。あいつ、ちよつと癖があるだろ？」

「そつ……ですね。まず、魔法が防御魔法だけで……どんな子かと思いました」

はっは！と、ゲンヤは笑う。

「あいつは普通の魔導士じゃねえからな。まず、俺の息子だし」

「それ関係ないですよん……あ、そういえば、アキナ君の魔法って、『プロテクション』とかじゃなくて『ガード』っていう魔法だそうですよ？今度レアスキルの特許証ださなあかん」

「レアスキルだあ！？おいおい、マジかよ」

「マジです」

そんなことを話していると自分の仕事に一区切りついたらしいギンガがやってきた。

「アキナ君がレアスキル？本当？」

「そうなんよ。だからこっちも特許証ださなあかんくて……」

「へえ……アキナ君が……」

ギンガは少し嬉しそうな目をしながら呟いた。
そして再びこっちに目を向ける。

「ね、アキナ君、メンバーの中ではどうなの？」

「そうやねえ……とりあえずフォワード陣の中じゃ一番強いと思うよ」

「？」

はやてはそのまま、ただな、と続ける

「彼早朝訓練にでないんよ」

「えええ！？どうして！？」

ギンガはとても驚いたような顔をしている。

アキナは柄が悪かったりするが、別に不良のような類ではなく、訓練やデスクワークなどすべてきちんとする人だった。そのような人が訓練をサボるなど信じられなかった。

しかし、次の言葉を聞くと

「それがな、朝起きれないらしいんよ」

普通に納得した。

「あ………確かに。こっちにいたときは私が毎朝起こしてたからなあ………。朝ご飯も食べられないほど朝弱くって………ふふ！」

ギンガは呆れながらも、懐かしそうな目で話す。その表情はなんと

もいえないものだったが。
あんたらは夫婦か！、と心の中でつつこみを入れつつはやては続ける

「でもな、そのせいか知らんけど毎日ヴィータと1001やってるなあ。気づいたら凄く上達してるんよね」

何時も見ているわけではないが、たまに見るそのような風景は毎回違って見えた。

「へえ……そうなんだあ……。いいなあ、そっちの部隊。楽しそう」

「楽しいて……あ、ほら。そんなこと言うてしまつとゲンヤさんないてしまつて？それに今度から応援頼むんやから、こっちにこれる日も多くなる」

「……そうね。それまで楽しみにしてるわ」

「ん？あかん！もうこんな時間や！」

「あら？なんかあるの？」

「なんか何も、私はコレでも部隊長なんよ！？」

ソレを聞きギンガは笑った。

はやてはすばやく身支度を整え、帰れる準備をすると、部屋を立ち去ろうとする。

そのとき終始空気だったゲンヤは今になってアキナのレアスキルという事実のショックから立ち直る。そしてはやてに声をかけた

「一言ぐらい言ってから出て行けよ……八神、いいか？一つ言っておく。アキナは怒らせるなよ」

「え？」

突然の事態に戸惑うはやて。そこにギンガが補足した

「うん。本当に気をつけて。あれは危ないわ。私も一度任務中に見ただけど、あれはおかしいわ」

「……わかった。気をつけます」

「一体どんなことになるんや!？」

そう、思いながら、はやては身支度をして部屋を出た。

そのころのリイン

「ふにゃ〜……」
「i n はやて、s ポケット(胸)」

とある場所のとある部屋。一人の男がモニターと睨み合いをしていた。

「ドクター、またその映像ですか？」

「ああ。とても興味深くてね」

ドクター、と呼ばれる男は薄笑いを浮かべる

「私の研究にとって興味深い素材がそろっている」

そついいながら見るモニターは以前のリニアレールジャックの映像だ。

そしてアップされたのはエリオ、フェイト。

「生きて動いているプロジェクトFのもの達を手に入れる事ができるチャンスだ。それに……………」

次に写されたのはアキナの画像

「彼……まさか『あの実験』の被害者が『まだ』いるとは……。どうだい？君が探していたものだよ」

そう、問いかける先にいるのは15歳程度の少女。黒い髪を長く伸ばし、後ろで結んでいる。

「そうね……また、合えるとは思ってなかったわ……君」

少女は少しだけ懐かしそうに名前を呼ぶと、うれしそうに微笑んだ。

第10話 同じ出身なら皆兄弟（後書き）

まさかのオリキャラ二人目登場ですよ……収集がつかなくなりそう
で怖いw

ちなみに「アキナ」「」の名前の由来は

書きはじめたのが秋だったから！

ですよ。その頃なぜかクソ暑かったけど（笑
いまはさむい…足に毛布巻いてますw

あ、アンケートです

海鳴市のイベント必要ですか？

Yes/No

正直サウンドステージ（だっけ？）知らないので書けるか分かりま
せんが二次創作の予備知識で行けそうな気も！

ということをお願いします！

次は……試験後かなあ……

あといつか魔法についての説明入れる気がします。

第11話 ホテル・アグスタ(1) (前書き)

遅れました!!

試験&試験によるだるーんです!

とまあ、出来は悪くないと思うので楽しんでいただければ!!
ってことでござ!

ホテルアグスタ(前編)です!

今回は批評もらえると嬉しいかもです(笑)

あ、ちょっと改訂。

ってかカートリッジ使うの忘れてた。

第11話 ホテル・アグスタ(1)

とある場所のとある工房の一角。

二人の人間が話していた。一人は白衣を着た長身の男。もう一人はやや近代的なデザインの和服を着た女。厚底の下駄を履き、手には自分の背丈より長いであろう刀を持つてる。

「どうだい？調子は？」

「ええ、悪くはありません。今日、ですよ。彼に会えるのは？」

「そうだよ。でも、その前にやるべきことをやってくれ」

「わかっています」

女は嬉しそうな顔を浮かべるや否や、顔を両手で覆う。その様子を見て男は薄ら笑いを浮かべた。

一方、とある機動六課

「……ん？なんか事件のにおいがする」

「何言ってるんですか？アキナ兄さん」

二人の男がロビーにて人を待っていた。

一人はアキナ⇨ナカジマ

機動六課の兄貴。フォワード部隊の未来のエースである。

一人はエリオ⇨モンデヤル

機動六課のドエロ担当。数々の女性に囲まれつつも顔一つ崩さない優男。おそらくむっつり。

早朝訓練を終え、「今日は任務があるから後でロビーに集合！」といわれたのでロビーに来てみたのだが、やはり男女の差かな。入浴時間というものは大きな差が出てしまった。そんなときにアキナがぼつりとこぼしたのだった」

「ちょっと！！アキナ兄さん何言ってるんですか！！！！？」

ん？いや、ちょっと紹介をだな？

「そんな紹介いきりません！」

んんう。エリオに怒られてしまったよ。

「……………で？何がどうしたんですか？」

「ああ、いや、なんとというか胸騒ぎ？っていつの？何か一悶着あり
そうな、何かがあるんだよ」

「意味分かりません」

とはいうものの、何か胸騒ぎがするというのも、何か起きそうな
気がする、というのも事実だ。

昔からそういつことを感じやすかったから間違いはないと思う。

「まあ、でも、気のせい……………だよな？」

「気のせいですよ……………あ、皆来ました！」

「ん？おお……………おいこら！おっせえよ！…！」

そんなどうでもいいことを考えているうちに待たせていた女性陣が
来たようだ。

頭をかきながら来るスバルと、いまだ頭に水滴を滴らせるキャラ。

「アキ兄ごつめーん！いやあ、キャラと話し込んだじゃってさあ……」

「あれ？ティアナさんはいないんですか？」

確かに、そこにいたのはスバルとキャラの二人だけ。いつもいるティアナがいない。

「ティアはなんか自主練してから行くって」

自主練？あのハードシユケジュールの後？やるねえ……若い子は違うわ。

まあ、無理してなきゃ良いけど。これから任務らしいから、倒れてもらつと困る。

「そうか……ソレよりキャラ、ちょっと来い」

「ふえ？」

キャラがトトト、とこつちによる。

俺はすつとタオルを取り出して思いっきりキャラの頭にかぶせた。

「わぶつ!?!」

「ちゃんと頭拭け馬鹿野郎」

頭をガシヨガシヨと拭いていく。もちろん、折角の髪を傷つけないよう、丁寧に。

あー懐かしいなあ……昔はスバルにコレやってたんだけどなあ……。

「ふわああああ……」

「あ、いいなあ、キヤロ。アキ兄凄いうまいんだよね」

一通り拭き終わったところで頭からタオルを引っぺがした。

「あ、ありがとうございます!」

「風邪ひいてからじゃおせえんだからな?」

なんとというか、兄貴という魂が再びついてしまった気がするんだ。昔のスバルをすげえ思い出したんだ。

「……………」

「?」

おい、エリオ。そんな顔しても俺はやらねえぞ？
男はダメだ。

第12話

ホテル・アグスタ

へリに入ってから任務の説明が入った。

今回の仕事はこれから向かう場所、ホテル・アグスタで行われる骨董美術オークションの警備だ。最近多発しているガジェットドローンが来る可能性があるということと呼ばれたらしい。今回のオークションには少々……いや、かなり貴重で危険なものがあるらしく、悪用されるととてもまずい、らしい。

それとガジェットドローンの製作者が判明。まあ、仮だけど。

一番の候補に挙がっているのは広域指名手配犯罪者

ジェイル「スカリエツティ

なんともまあ、悪そうではないけど、目つきが悪くヒョロツこい男だった。

まあ、実際俺らが捕まえたりするわけじゃないからそこまで関係はないんだけど、覚えておいて損はない。

さて、今日の任務の話に戻る。

建物内には既にヴィータ副隊長とシグナム副隊長が張っているらしい。んで、俺らはその増員として派遣だ。

「私達とアキナ君は建物の中の警備するから、前線メンバーは副隊長たちの指示に従ってね」

「「はい!」「」」

「はい?」

どうやらフォワード陣は建物以外の警備になるっぽい。
俺以外。

「なぜ俺だけ?」

「中の警備を女の人だけつてなると信用されにくい。あとアキナ君の魔法は用人を守りやすいから」

なんという。

「俺みたいな凡人が何かできますかね？」

「できる、じゃなくてやるのー！」

ですよー。分かってました。あつい言葉ありがとございませす。
………???なぜかティアナがこっち向いてるし。どうしたんだ？

まあ、ソレはさておき、俺は気づいたんだ。
スバル、お前が撫でてるソレ……。

ザフィーラさんやん。それでいいのかザフィーラさん。

「あの、シャマル先生。さっきから気になってたんですけどその箱
って……」

キャラが疑問の声を上げた。
そこにあるのは数個の箱。

「ああ、コレ？隊長と、アキナ君の、お仕事着」

そう、いわれてもピンと来なかった俺達は、ただただ頭を横に傾げるだけだった。

まあ、到着したときには分かったよ。うん。

俺がこんなもの着ちゃダメだと思っただよなあ……

「うわぁ……慣れねえ……」

ってかなんでタキシードやねん。

「アキ兄！似合ってるよ！」

「アキナさん締まって見えます……」

スバルとキャラの歓声は嬉しい。けどさ
締まって見えるってことは何時も締まっていないうことかい？
まあ、確かに締まってるとはいえないけどさあ……

と、警備なのに締まらない空間がしばらく続いた。

ホテル・アグスタ近郊の森

「ここ、ですよね」

「ああ」

フードをかぶった一人の少女と、和服を着た少女、二人の背丈の二倍程の大きさの大男がいた。
大男はフードの少女に向かって言う。

「お前の探し物はココにはないのだろう」

「……………」

少女は答えることもなく、じっと男を見つめた。
それに見かねた和服の少女はフードの少女に尋ねる。

「何か、気になるんですか？」

「うん。…………どくたーのおもちゃが近づいてきてるって」

少女は少しだけうなずくと、小さな声で答えた。

「おもちゃ……ガジェットのことですね。なんだ。私があるのに結局出すんですか」

「お前の任務は秘密裏に行う予定だろう。ただの目くらましだ」

「わかってますけど……ん？」

女は少し不服そうだったが、しぶしぶうなずいた。

すると突然目の前にモニターが現れた。モニターの中の相手は広域指名手配犯罪者、ジェイル・スカリエッティ。スカリエッティは画面越しに現れる二人の少女達を見て少し微笑むと言の葉を述べた。

「ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア、フユト」

「何のようだ」

「冷たいねえ、騎士ゼスト。近くで状況を見ているんだろう？あのホテルにはレリックはないんだが、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ。すこし協力してもらいたい」

「断る。それをとりに行くのはフユトの役目だろう」

「いや、そうなんだがね。どうもガジェットたちでは陽動もできな

いのだよ。見ていて分かるだろう？どうも機動六課の戦闘メンバーすべてが出ているようだね。特に守護騎士たちが猛威を振るっているんだ」

現に展開されているガジェットの包囲陣は既に崩壊しかけ、陣をなしていない。

スカリエッティはフユトの潜入を助ける陽動のためにガジェットを敷いたのだが、フユトが潜入する前に陣が壊れてしまっているのだ。

「どうだい？」

スカリエッティは事情を話した上でさらに問いかけた。
しかし大男、ゼストは即座に断る。

「レリックが絡む時点で互いに不可侵を守ると決めたはずだ」

スカリエッティは一度困ったような顔をしてからルーテシアに顔を向ける。

「ルーテシアはどうだい？頼まれてくれないかな」

ルーテシアは少しだけ顔を縦にふり、うなずいた。

「いいよ」

「やさしいなあ。ありがとう今度どうかお茶とお菓子でもおごらせてくれ……君のデバイス『アスクオレピオス』に相手の情報を送ったよ」

「うん。じゃあ、ごきげんよう、どくたー」

「ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ。二人とも」

そういつて、通信は切れる。

ルーテシアは自らのフードを脱ぎ、そばにいたゼストにそれを手渡した。そこで今まで黙っていた和服の少女、フウトが口を開いた。

「いいんですか？ルーテシア」

「うん。ゼストやアギトはどくたーのこと嫌うけど、私はそんなにどくたーのこと嫌いじゃないから」

「そう、ですか……でも無理はいけませんよ？私の陽動のためなんか危険にさらされちゃダメですからね。いざとなったら私も逃げますから」

ルーテシアは一度だけ頷くと、前へ歩み出て魔法陣を形成。魔法を発動させるべく詠唱を始める。

「我は乞う……」

その詠唱の後ろで和服の少女はゼストへ小さな声で話しかけた。

「ゼストさん」

「なんだ」

「ルーテシアはああいつてますけど、あの子ぼんやりしてるところあるから……その、見てあげててください」

「分かっている」

それだけ言つと二人は無言になる。

フユトはルーテシアにとつて姉のような存在にいる。ゼストはルーテシアの保護者、といった感じた。だが、だからといって決してゼストとフユトの仲がいいとはいえなかった。ルーテシアのことを心配しつつもスカリエッティに対し割りとは従順であるフユトをゼストはあまり信頼していないからだ。一応『ルーテシアが好む人だから』と話すことはあるが、必要以上の会話はなかった。

フユトは肩をすくめつつ、ルーテシアの成り行きを見守った。そしてルーテシアの魔法が発動したことを確認すると、「終わったら一緒に帰りましょーねー」と一言だけ残し、すつとその場から立ち去っていった。

ホテル・アグスタ敷地内

アキナはホテルの外部に向かい全力で走っていた。

開始までもうすぐ、となったところでガードビーツから警告が入った。

どうやら敷地の近くにガジェットドローンが現れたらしいのだ。そこへは副隊長であるシグナム副隊長、ヴィータ副隊長が向かっており、すぐに鎮圧されると思われる。しかし思った以上に相手が多いのと、謎の召還魔導士によるガジェットの強化、増援により事態の鎮圧が困難になってしまった。そしてホテル内の隊長に現場の加勢を言い渡され現在現場に急行している。

「はっ……はっ……！ガードビーツ！セットアップ！」

《Set up!》

走りながらバリアジャケットを身に纏い、ホテルの入り口を走り抜ける。そして目の前に現れたのはガジェットドローン。

すぐにガード・ランスを展開し、相手に打ち込む。3体いるうちの2体に当たり、1体は貫通、1体はAMFによってはじかれてしまった。いつもなら貫ける力であったのだが、どうも出力が上がっているらしい。

「どつなつてやがる」

《召還魔導士による強化だろうな。一気に倒すより1体1体確実に潰したほうが早い》

「召還魔導士はどこにいるか分かるか？」

《……出てこねえな。召還魔導士をつぶすのはあきらめたほうがいい》

「うち！召還魔導士か……見えない分、厄介だな……」。

アキナは再びガードを形成。すぐに発射。的確に相手を貫いて爆散させた。

そしてアキナは少し考える。

キャラはともかく、エリオは確かに何とか倒せるだろう。また、パワー重視のスバルも何とか可能なはずだ。

ならティアナはどうだろうか？多重弾核を使うにしろ相手が相手だ。ただでさえ当てるのが難しい相手に難しいテクニク。ミスをしてしまうと見方が被害を蒙ってしまうこともありうる。ティアナは少し無茶をしやすいから……

「急いだほうが、よさそうだな……」

アキナは全速力で走り始めた。

クツ…!!

自分の撃った攻撃を回避され、防がれたティアナはイラついていた。自分の無力さを呪いながら、相手が撃ってきた攻撃を打ち落とす。

「ティアナさん!!」

!!?

キャロの掛け声で振り向くとそこにはガジェットが。

背後から来たこともあり、攻撃を打ち落とせず飛んで避ける。そしてすかさず射撃。しかしそれすらもAMFで防がれてしまった。

『防衛ライン、もう少し持ちこたえてね! ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから!!』

今回の指令隊長、シャマルの言葉。

しかしティアナはその言葉に苛立ちを覚えた。

「守ってばっかじゃ行き詰まります!! ちゃんと全機落とします!!」

『ちよつとティアナ大丈夫!? 無茶しないで!!』

「大丈夫です! 毎日朝晩練習してきてるんですから!!」

思い切り啖呵をきつたが、内心不安でいっぱいだった。

しかし、ここで諦める訳には行かない。なんとしてでも成功させなければならぬ。成功させないといけない理由がある。そして全員に指令を出す。

「エリオ! センターに下がって! あたしとスバルのツートップで行く!!」

「あ、はい!」

「スバル! クロスシフトA!! 行くわよ!!」

「おう!!」

全員に指令を出したティアナはその場で一度深呼吸をする。

(証明するんだ。特別な才能や凄い魔力がなくなつて、一流な隊長達の舞台でだつて、どんな危険な戦いだつて……)

ティアナの周りに魔方陣が展開される。

何時も以上の魔力をこめたためか、何時も良り明るく光る。そして周囲に魔力弾を構成する。それはいつもの様に1、2発ではなく、

大量に。

「私の、ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ちぬけるんだって！」

それをモニターから見ていたスシャマルはティアナに呼びかける。

『ティアナ！四発ロードなんて無茶だよ！それじゃティアナもクロスミラージユも！』

しかしティアナが止まることはない。

「撃てます！」

《Yes!》

そしてティアナはそれを発射する。

「クロスファイヤー、シュートツーーー!!!」

一斉に発射された魔力弾は次々とガジェットを貫いていく。
1体、2体、と確実に破壊。

「はああああああああああああああああああ……！」

撃墜する数はどんどん増える。

しかし一発だけはずしてしまった。

そしてその弾丸は真っ直ぐに飛んでいき

え？ス、バル？

スバルへ向かって吸い込まれるように飛んでいった。

全速力で走っていたアキナはやっとこさフォワード陣を見つけ、合流しようとする。

しかしどうやら様子がおかしかった。

いつもはトップを張っているエリオが後ろに下がり、センターにい

るはずのティアナがトップを張っている。
ティアナは異常な魔力を放出し、それを発射している。

ヤバイ!!!

アキナは本能的にそう確信した。
そしてそれは現実のものとなる。
ティアナが誤射をした。そしてそれは遠くにいるスバルに向かって直進する。あの弾速、魔力濃度から考えるに当たったらただではすまない。

「くそ！遠くだと精度が落ちるが……ガードビーツ！カートリッジロード！軌道上に向けガード展開！！」

《おつよ！》

アキナはカートリッジを使用し、弾丸の軌道上に3枚のガードを張った。しかし距離があるためあまり強度があるわけでもない。
ティアナの放った弾丸は速度を緩めず進む。

パリン！！

一枚目がいとも簡単に貫かれる。

パリン！！

二枚目も貫かれた。

「くっそ！！」

アキナは残る一枚の強度を限界まで上げる。

ガードと弾丸が拮抗する。しかしアキナの作ったガードは術者との距離があるためにそれを抑えきれない。少しずつひびが広がった。

「……………耐え、ろ……………！！」

アキナは走りながら魔力をこめる。

しかしパリンという音と共に、ガードは崩れ去った。その光景に誰もが背筋を凍らせた。

「はぁ！！」

しかしその弾丸は遠方から駆けつけてくれたヴィータによって弾き飛ばされた。

「ティアナ！このバカ！無茶やった上に見方撃ってどつすんだ！！」

その言葉を聞いてアキナはその場へたり込んだ。

第11話 ホテル・アグスタ(1) (後書き)

どうでしょう?? ちょっと書き方変えてみたり(笑
感想、誤字、訂正待ってます!!

第12話 ホテル・アグスタ(2) (前書き)

ごめんなさい、スツごく短いです。

まあ、今日中にもう一個できたらいいなあと思っています。

まあ、今回はやっと物語の核心にきた感じですね。

でわ、どぞ

第12話 ホテル・アグスタ(2)

カツン、カツンと高らかな音が地下に響く。地上でガジェットたちが暴れている最中、一人の少女は真っ直ぐにある場所へ向かっていた。

「うん。ドクターが求めていたものはこの辺に……あ、あれでしょうか？」

一つのトラックを見て、少女は近づいた。そして手に持っている刀を引き抜き、何かをぼそりとつぶやいた。そして少女はためらうことなくトラックの荷台へ斬りつけた。ガシャン、という少し大きめの音と共に扉はひしゃげ、中がむき出しの状態になった。そして中から一つのアタッシュケースを取り出す。

「これ、ですよね？」

少女はひとしきりそれを眺めた後、それを左手に持つ。タッタッタ、と誰かが近づく音に気づき少女は身を隠した。破壊音に気づいたらしい警備員がトラックに近づく。そしてそこへライトを当てた。しかしその先には誰も居らず、不思議に思った警備員は辺りをライトで照らし始めた。その際に少女は警備員の背後へすっ

と近づき、右手にもっている鞘に収まった刀を大きく振り上げ、そのまま警備員へ振り下ろした。

少女は意識を失い崩れ落ちる警備員を音を立てないように床に落とし、辺りに誰もいないことを確認してその場を早足に離れた。

.....

「もういい。あとはあたしがやる。二人まとめて、すっこんでろ！
！」

ヴィータに怒鳴られるスバルを見ながら、全力疾走と急激な魔力の消耗でへたり込んでいたアキナは息を整えるとティアナへと視線を向けた。任務でミスを犯す……それも上官の警告を無視して犯した罪を背負うティアナの精神は大きく揺れていた。

自分の犯したミスが信じれなく、いまだ呆然としているティアナにアキナは近づくと頭をポン、と叩いた。

「何、大丈夫だ。ミスなんて誰でもある」

「.....」

声をかけられても呆然としているティアナを見つつも、この状況にどうすればいいか戸惑ってしまっているライトニングの二人にアキナは念話を飛ばした。

(悪いな、二人とも。遅れた)

(い、いえ。そんなことはありませんが……)

(俺達は向こう側に行こう。ここにいたらヴィータ副隊長に怒られそうだ)

(あ、はい)

軽いジョークをかましつつ、3人は現在地より少し離れた場所に移動した。

アキナはスバルに「気にスンナ。ティアナのことは任せた」と念話を飛ばし、目の前にいるガジェット殲滅に向う。途中でスバルの悲鳴が聞こえたが、ココはパートナーの役目、そうやってそのまま離れていった。

大体のガジェットがスクラップと化し、あとはエリオとキャロだけで何とかなるだろうと考えたアキナは、元の配置先、ホテル内部に向かっていた。

すでにオークションは開始していて、内部では司会のおかげでいい盛り上がりを見せていることだろう。だがオークション会場目の前に迫ったところで一つの事実に気がついた。

「あれ？ガジェットってことは搬入口が一番危なくねえか？」

警備というのは敵を入れないためのもの。ならば押さえるべきなのは入り口だ。

しかし入り口というのは正面玄関だけではない。裏口はもちろん、物品の搬入口もそれに含まれる。今回はオークシヨンのためすべての物品は会場に出ているが…。

誰かが警備に回っていれば良いがフォワード陣は正面玄関、ヴォルケンリッターの面々はフォワード陣より先の上空で戦っていたため誰かが行っていることはないかもしれない。警備に回っているとすれば一般の警備員となる。

それに気づいたアキナはすぐさま隊長たちに念話を飛ばした。

「なのは隊長」

『ん、アキナ君？どうしたの』

「一つ気になることが。搬入口の警備は誰か行ってますか？」

『ちよつと待つてね……………誰も行ってないみたい。搬入口のエレベーターとかは閉鎖されてるけど……………でもどうかしたの？搬入口には何も無いはずだよ』

「いや、今回の任務前に言っていましたよね？」

『???何を?』

「今回のオークシヨンは密輸の隠れ蓑になるって。その密輸品がロストロギアの可能性は？」

『それはっ！！まずいかも。もしかしたら……ガジェットの狙いは……』

今回のオークションはかなり大型。搬入口の取引など、一般の搬入と区別がつきにくく、見逃してしまうことがある。もし今回のオークションで密輸が行われていて、その物品が貴重な、危険なものだったなら。

いや、むしろその物品を相手が狙っていたとしたら……。

ガジェットという分かりやすい敵は格好的になる。しかしその分、影で動くにはかなりやり安くなるだろう。

「そつつすね。陽動の可能性あります」

『……ごめん、私達は今動けないから、アキナ君、悪いけど見てきてもらえるかな？』

「了解っす」

そして建物見取り図をガードビーツに送ってもらう。搬入口はこの建物の地下にあるらしい。

「チッ！何も起こってねえ事を祈る！！！」

アキナは進んでいた道を引き返し、急ぎ足で搬入口へ向かった。

13話

ホテル・アグスタ（2）

搬入口に着いたアキナは辺りをさっと見回した。一見何もなさそうに見えたが良く見ると柱から足が伸びていた。すぐに駆け寄り、気を失っていた男性を抱えおこす。

「おい！おっさん大丈夫か！！？」

「あ、ああ。すまない……………あとまだ20代だ」

大事には至らなかった用で、文句を言えるほどに意識もはつきりしている。命に別状はないだろう。なのはさんの情報によればココにはオークション関係の人はいないらしい。つまりここにいるということは密輸業者のひとりと見て問題ないだろう。

「時空管理局機動六課、アキナナカジマだ」

「じ、時空管理局だと！！？管理局がなぜココに……………くそっ、地上だけじゃなかったのか……………」

「あんたは密輸業者の奴らだな？」

「頼む！！見逃してくれないか？金なら、ほら、たくさんある！！」

「わりいがそれは受け取れねえな」

アキナは男をきつく睨んだ。そして少し考えた後、一つの提案を出す。

「そうだな、何があったか教えてくれれば、考……考えてやる」

「話す！話すから！！」

そしてアキナは男から事情を聞いていく。

しかしものの2分後にはアキナの顔は落胆でいっぱいになっていた。

「なるほど？変な音がしたから見てみたらトラックが壊れてて？んで、辺りを調べてたら意識を失ったと」

「そう、そうだ！」

ふう……「こりゃあ、なんというか

「まったく役にたたねえな。さっきの案却下。お前現行犯逮捕」

「そ、そんな……」

「まあ、俺もそんな暇じゃねえからな。このあたり調べなきゃだし」

どうするか…と悩んでいたところにガードビーツから情報が入った。辺りに残っていた魔力の残痕から相手を追えるらしい。

コレはしめたと顔をほころばせるアキナは通信機を取り出し、一人の人間に連絡を入れた。

「あ、シグナムさん。手、空いています？ちよつと密輸業者の野郎見つけたんですけど、俺手え空いてなくて……そうつす、尋問よろしくお願いしまつす」

いい笑顔でそう告げるアキナの顔に男は恐怖を覚えた。多分この男の未来はなかったと思う。

ガードで男を閉じ込めたアキナは、地下駐車場の先に進む。後ろから聞こえたのは男の断末魔だったとか。

「この辺で大丈夫でしょう。して、ここはどこ？」

どうやら搬入口から人目を避けるように逃げていた少女、フユトは随分奥に入ってしまったらしい。辺りは暗く、駐車場ではあるが車は一台もない。

これはどうしたものか、と悩んでいるところに一つの足音が聞こえた。もうバレたか？と思い、隠れようとしたが隠れるにも隠れるものがなく、逃げ出そうにも逃げる場所も分らない。これ以上逃げて迷ってしまえばそれこそゲームオーバー。いわゆる万事休す。とはいってもどうすることもできない。ということではばらくシラを切ると心に決めた。

「ああ？お前か？トラックぶち壊しやがったのは？」

「いえ、私では……」

「はい、嘘。てめえの魔力のデータが取れてるんだ。大人しく降伏しな」

残念ながらばれてしまっている様だ。どうやって自分を追ってきたのか、と考えたが魔力から追われてしまっていては仕方がない。

「優秀、なんですね。なるべく追われないように証拠は消したつもりなんですが……」

「まあ、俺にかかれば余裕だな」

《やったのは俺だけだな》

「黙れ」

デバイスと漫才をやる二人にクスリ、と笑ってしまいが、このままではまずい、と考えるフユトはこの状況を打開すべく一つの案を考える。

「貴方が探している物は、コレですか？」

フユトは左手に持つアタツシユケースを持ち上げた。その行為にアキナの顔がピクリと反応する。

「ああ、ソレみてえだな。寄越しな。刑が少しは軽くなるかもよ？」

「残念。コレは渡せません」

「だろうな。残念だ」

「ところで、出口はどちらに？」

「俺の後ろだが……通さねえよ？」

「ですよねえ。でも、力づくでも通させてもらいますよ？」

フユトはアキナのことを睨みつけつつ、左手に刀を持ち替えて右手

で引き抜いた。ギリリと光る刀身が冬との頬へ光を反射させる。二人がにらみ合う時間が続き、次の瞬間二人同時に動き出した。

アイゼンメテオール
「鉄の刀!!」

「ガード!!」

フユトの放つ斬撃をアキナが受け止めた。火花が飛び散り、ガードに少しだけひびが入る。

「私の攻撃をガードしますか。やりますね」

「そりゃどうも。てめえは思ったより弱えじゃねえか」

「本気じゃありませんし」

「だろっな……」

「ではこれでどうですか？」

憎まれ口をたたき合いつつ、刀を何度も振り下ろす。アキナはすべてを防いでいるが、あまりにも早い連撃なのでガードの回復が追いつかず、ひびが大きくなっていく。

それに危機を感じるアキナは打開策を考え、即座に実行。

「チツ……仕方ねえ、コレならどうだコラ……カートリッジロード
！！」

「！！！？」

すべてをはじき返していたガードの性質が急に変わる。

振り下ろされる刀身を火花を散らしながらはじいていたガードが急に柔らかくなり、ガードが凹んだかと思うと、刀身を包み込んだ。あまりの事態にフユトは驚く。そして刀身を引き抜こうと手前に引いた。

「おせえよ！ガードビーツ！！」

《Impact!》

「！！」

しかしその行為も意味を成さず、フユトの刀身を包んでいたガードが大爆発を起こした。

その爆発は至近距離にいたフユトはもちろん、アキナまでも包み込む。しかしアキナは自分の前にガードをさらに発生させその爆風を避けていた。

「どうだ？」

ガードのおかげで爆発を避けたアキナは、攻撃を食らっていたと思われるフウトの姿を探す。爆煙が風に流され、前が見えるようになった先に見えたのは

「ああ？なんでそんなところに居やがる。ってかなんだそりゃ」

大型の槍を持ち、自分よりはるか後ろ……出口に近い場所にいるフウトの姿だった。

「危ない危ない。喰らうところでした」

「何をした？」

「いやいや、企業秘密です。まあ簡単に言えば爆発が起きて刀が自由になった瞬間に逃げたぐらいですかね？」

アキナの質問にフウトはさらりと答える。そして少しの間アキナの顔を見た後、ポン、と手をたたいた。

「そういえば、自己紹介していませんでしたね」

「ああ？自己紹介なんて必要ねえよ。どうせ捕まるんだ。署で聞いてやる」

「いえいえ、捕まる気もありません」

フユトはそれだけ言うと自分の武器の槍にぼそりと呟く。
すると瞬く間にアキナのすぐそばに現れ、身長の高いアキナを見上げ

「私、フユトといいます。お久しぶりですね。あなたの妹です」

と言った。

瞬間、沈黙が流れた。

第12話 ホテル・アグスタ(2) (後書き)

まさかの妹登場。

まあ、キーキャラ？分かりませぬ笑

感想よろしくです

第13話 師匠（前書き）

なんかどんだん腕が落ちてる気がします……
ってか何かきたいか分からなくなってきたる……

まあ、一応投下!!!

後半遊びすぎた気もします！（笑）

でわ、どぞ！

第13話 師匠

「私、フウトといます。お久しぶりですね。あなたの妹です」

フウトがそういったとたんに沈黙が流れる。

アキナは目を見開き、冬とはきよとんとしている。なんとか衝撃から復活したアキナはかろうじて一言だけ言った。

「今、何だった？」

「え、だから私はあなたの妹ってことですよ？」

再び沈黙が訪れる。

アキナには昔の記憶がない。出生から、自分の家族、すべて。もちろんその後の施設や、ナカジマ家での記憶は残っているが。

「ああ、勘違いしないでくださいね？もちろん施設内の兄弟でもありませんし、本当の兄弟でもありません」

アキナへさらに衝撃が走る。

なぜ自分の過去を知っている？施設にいたことは管理局しか知らないはずなのに……

沈黙を続けるアキナを置き、フウトはどんどん話していく。

「まあ、覚えていないかもしれませんが……あれはかなり昔の頃ですし、私もあの人に拾われるまでそのこと思い出したくなかったですから……ん？どうしました？」

「お前、俺の過去知ってるのか？」

「知ってるも何も……あ、もしかして覚えてませんでしたか？残念ですね」

そんなことをしていたらフウトの方からピピピピ、という音が聞こえてきた。

「あ……時間のようです。残念ですね、もっと話していたかったです……」ココでお別れのようです」

「なっ！！待て！！！」

「でわ、おさらばです！！！」

アキナのすぐそばにいたフウトは自分のデバイスに向かって一つの単語を呟く。それと同時にフウトのデバイスが扇に変わる。そしてそれをアキナの方へ一回扇ぐ。すると尋常じゃない突風がアキナを襲った。アキナは耐えられなくなり大きく吹き飛ぶ。吹き飛びながらもフウトを目で細くしていたアキナは、フウトがデバイスを大槍に変化させたことだけを確認する。ここで攻撃はされたくないと思っていたのだがそうはならないようで、

フユトは目にも留まらぬ速さ……目視できない速さでその場から消えていった。ダダダダと大きな音が聞こえる辺り、走っているのだろうが追いつけそうにない。

「フユト……何者だ？」

アキナはそれだけ呟くと来た方向から引き返していった。

その表情は嬉しいような、悲しいような、難しいような、よく分からない顔をしていた。

第13話

師匠

フユトに逃げられてしまったアキナは、外にいる隊長に連絡を入れて外へ戻った。あ、そういえばシグナム副隊長に尋問された男性は情報をすべて抜かれた挙句精神科へ放り込まれたらしい。シグナムさんなにやった。

外へ出て、正面玄関のほうに来てみるとフォワード陣がなのはさん中心に集まっていた。そのうちなのはさんとティアナだけが抜けていった。十中八九、今日の失敗のことだろう。

「よ、元気にやってっか？」

「あ、アキ兄！」

スバルは思ったより元気らしい。

「俺らは何やりゃいいんだ？」

「現場検証、だね」

「また面倒な仕事だな……」

ここはなんとかサボりたいところ……
だがどーすることもできねえか……

「仕方ねえ、俺もやるか」

「うん！」

スバルと二人で並んで作業を始める。

「お前さ、今日の失敗何が原因か分かるか？」

「う、うん。あたしがちゃんと見て走らなかつ……痛っ!？」

「あほ、あれはどう見てもおめえは悪くねえよ」

スバルの頭を軽く殴る。それがいい場所に当たったようで、パコンという音がした。

「で、でも！あれはあたしが!!」

「おいおい、いい加減殴るぞ?」

と、い、い、つ、つ、一、発。

「痛い……もう殴ってるじゃん……」

「ちゃんとした理由もなく、ミスした相手を庇うな阿呆。あのなあ、お前ティアナのパートナーなんだろう？ならパートナーの間違いぐらい気づけよ。あれは無茶をしたティアナが悪い。実力もないのにああいうことをするから事故が起きる」

そういつた途端スバルは目を変え、

「ティアナは弱くなんかない!!」

と叫ぶ。周りにいた局員が驚いてこっちを見ているのに気づき、すぐ下を向いたがもう遅い。

そして耳元で叫ばれた俺の片耳は今何も聞こえない。

「誰が弱いかった！！自分と技のレベルがあってないって話だよ！……そうだな、簡単に言うならおまえがあのさんのSLBを使うようなもんだ」

「あ、なるほど……」

「あいつは多分フォワード陣じゃ一番強えよ。判断力もあるし、射撃性能も悪くない。それに珍しい幻影魔法まで使える。それにかなりの努力家。もう欠点なしって感じ」

ティアナのことをべた褒めするアキナ。そんなアキナの言葉をスバルは黙って聞く。

アキナの姿はまるで昔のことを語るような感じだった。

「ただな、そういう奴ほど周りがみえねえんだ。回りばかり気にして、自分に気づかねえんだよ。だから無理をする」

「……よく、分かるね」

それはパートナーであるスバル自身よりも分かっているようで、ス

バルは少し悔しさを覚えた。

「ああ、むかしおんなじ様なバカがいてな……だからな、お前はそれを支えるだけで良いんだ。それはミスを庇うことじゃない。むしろミスを指摘してやらねえといけねえ。それは難しいかもしれねえが、パートナーしかできねえからな」

「……そう、だよな。……うん、あたし、がんばるよ！」

スバルは先ほどの自分を思い出し、悔しそうに下を向く。そしてそのまま顔を上げ、高らかに宣言した。
それを見たアキナはスバルに向かって言う。

「ゲンヤさんの口癖だよ。覚えてるか？」

アキナがスバルに問いかけると、スバルは少しだけ悩み、ああ、あれか！と顔をほころばせる。

「失敗しねえ奴は雑魚のまんまだ」

二人そろえていったことに、二人は同時に吹き出した。

二人はそのままいろいろなことを話した。

今日の失敗事故から始まり、その原因。また発展してティアナの

出会いやティアナの兄、ティードラのことまで話した。

そして思う。

訓練のときのことや、休みのときの話もしたけど完全にティアナに頼りきり……兄貴として心配になってきたよ。

そんなことをしているとむこうからティアナが近づいてきた。連れ去られた(?)ときより表情も明るくなっている。

「ティアナ来たぞ。行ってやれよ」

「うん。そうする」

「へんな事いうなよ」

「言わないよー」

アキナはスバルを送り出した。

しかしその2分後には頭を叩かれてたからきつと変な事言ったんだろう。あいつ将来大丈夫か？

スバルはティアナの元へ行き、自分の場所の現場検証もあとは調査員の人に任せるのみになったアキナは、ライトニングのほうへ向かった。

そばによって見るとキャラ口が何かを食い入るように見ていた。キャラ

口にはねないように、こっそり近づく。

「キヤアロオ、何してるんだあ？」

「ヒイイ!!」

思ったよりもびっくりして俺もびっくりだ。

「あ、アキナさん!! あれ、見てください」

「あれ？」

キヤロが指を差した先はなのはさんと一人の男性。

「ユーノさんじゃねえか」

「ユーノさん？」

そこにいたのは本局では彼氏にしたい人ランキングの上位者アンカ
ー、ユーノが。

「ああ、無限書庫の最高責任者、ユーノ司所長。無限書庫の整理を
行ったのもあの人だ。んで、俺の師匠」

「師匠!!? アキナさんのですか!？」

「おお。あの人は防御魔法のプロフェッサーでな……にしても、い

い雰囲気出してるなオイ」

「シャーリーさんによるとなのはさんとは幼馴染だそうですよ？」

「ほお……なるほど。つまりなのはさんが……よし、キャロ。あとでユーノさんのところ行くぞ」

「ええええ！？何ですか！！？」

「愛弟子からのプレゼントってなあ」

そのときのアキナの顔は凄く悪だったという。

そして現場検証終了後。

どうやらなのはさんたちの方も話が終わったらしく、こちらに向かってきた。

そしてココでミッションスタート。

「あ、アキナさん。ホントに行くんですかあ？」

「つたりめえだろ？」

一気にユーノさんのほうへ向かう。キャロは…後ろで見てるみたいだな。

「久しぶりですね、ユーノさん」

「え？……アキナ！？アキナかい？大きくなったなあ……！！」

きよとん？としているのはさんとキヤロ。

「え？ユ、ユーノ君、アキナ君の事知ってるの？」

「うん。前に魔法を教えたことがあったんだ。ほら、前に推薦状書いたでしょ？」

「あっ！！」

そういえば、と驚くのはさん。

「それにしても、本当に大きくなったなあ」

「っへへ、もう見上げることなんてねえっすね」

「もうそろそろ、抜かれちゃいそうだなあ……」

今の俺の身長はユーノさんと同じ……もしかわ少し小さいくらい……17歳……イケル……
そんな感じで驚いていると衝撃から復活したなのはさんが聞いてきた。

「ええつと……結局どんな関係？」

「……聞くも爆笑、語るも爆笑……」

「爆笑なの!？」

「ちょんまげ」

「いやそこでちょんまげする意味が分からないよ!？」

「ならば仕方ない。回想と行こうじゃないですか」

「……ユーノ君。手短にお願い」

「あはは……」

「スルー!？」

簡単にスルーされてしまった……

「えつとね、あれは7年ぐらい前かな……たまたまある資料を取りに施設にいかなくちゃならなかった時があったんだ。そのときあったのがアキナ。その頃のアキナには名前がなくて、その先生に、どうせだからつけてくださいって言われちゃって……あまりに急だったんで、地球の『秋』からとって名前をつけたんだ。それが始まりだったな」

「んで、その後も何回かユーノさんが来てくれて、魔法に興味があ

った俺はユーノさんに教えてもらってたわけです。まあ、いなかったときはザフィーラさんに教えてもらってましたけど」

「なるほど……」

思えばこの話は誰にもしていなかった気がする。
なのはさんが最初とは……

「そういえば、なのはさんも教わってたんですよね？」

「うん。昔ね」

「ユーノさん教えるのうまいですよ〜」

「うん！本当にソレ！！教導隊に欲しいぐらいだよ！！」

でもソレやったら無限書庫が再び巣窟になる気がします。
で、とアキナは思い出したように言う

「ユーノさんがある日言ってたんですよね。これってなのはさんのことだと思っんですよね……。確か、『前教えてた人はね、いつでも訓練をサボらない人でね』」

「?????」

きよとんとするなのはさん。一方ユーノさんは少し固まってる気が

する。

「『僕は彼女のそんな姿が好きでさ。気づいたら彼女のことを好
わあああああああ！』」

ユ一ノさんが叫んで俺の言葉を消してしまった。
顔は真っ赤で、なのはさんのほづをじっと見てる。一方なのはさん
はきよとん。

「アキナ！なんで今ソレを言うのさ！！」

「いやいや、仲よさそうだったからつい！」

「ついじゃないよ！！」

「ここまで想ってるならいけますって！Let's アタック！！あ、
なのはさん、これ覚えてます？これも言ったらしいんすけど」な
のはのことは僕が「アキナ！！」

「え？え？」

ここまでできてきよとんとしてるのはさんはある意味最強。男殺し
だと想う。

これぞ愛弟子からのプレゼント（笑）

そして解散後、ユーノさんに呼び出されて久しぶりの訓練（一方的攻撃）があつたのは言うまでもない。ただユーノさんならなのはさ
んとお似合いだと思っくん……グハッ。

第13話 師匠（後書き）

なんというか：ユーノ×なのははいけると思ってますよね
まあ、いつかアキナにプロデューズさせます（笑）

では、感想その他まっています！

第14話 兄の想い(前書き)

なんかミスった感MAX

第14話 兄の想い

ある隊舎のそばのただ広い草原の中、一人の男が立っていた。そこへ一人の少年が近づき、話し始めた。二人はとても親しげで、兄弟のようにも見えた。

「ティーダ！」

「おお、アキナか。また抜け出してきたのか」

一人はアキナ

施設に入り、たまに施設を抜け出してはティーダに会いにきていた。もう一人はティーダ「ランスタ」

時空管理局首都航空隊所属の一等空尉で執務官志望のエリート魔導師。たまに来るアキナのことをとてもかわいがり、弟のようにも思っていた。

アキナはいつものように話しかけ、ティーダはいつものようにアキナへ返す。それはごく当然なことでも何もおかしいところはない。一見そのように見えたが、アキナはティーダの異変に気づいていた。いつもの優しい顔がなかったのだ。

「ティーダ。なんかあったのか？」

「……なんでだい？」

「顔、すげえこええぞ」

ティードは一瞬驚いた顔をして、すぐいつものような優しい顔に戻す。

そしてアキナの目をじっと見た後、ポツリと話し出した。

「……この前の仕事でね、少しミスをしてしまったんだ。そこで上官に『任務に失敗する奴なんかいらぬ。しばらくココへは来るな』って怒られてしまったね」

「はあ？何言ってるんだそいつ！誰だって失敗するのは当たり前だろ！？」

アキナの言葉にティードは頷いた。そして先ほどとは目を変えた。

「……上官には『お前には無理だ。』って言われてるんだけどね。このままランスターの名を汚したくないんだ。だから、僕はそいつを追わなきゃならない。そのために無理やり任務をこじつけた」

辺りに沈んだ空気が流れる

「……………それって、上官に逆らったって事か？」

「事実上、そうなるね」

「ダメだ！ティード言っただじゃねえか！どんなときにも上官には逆らうなって」

アキナは声を荒らげて講義する。

そんなアキナの肩をティードはがっしり掴む。

「ああ、僕のやることはいけないことだ。アキナは絶対にやっちゃいけない。でもね、僕には妹がいる。妹のためにも、名誉を挽回しなきゃならないんだ」

「そんな……」

「だからアキナ。もしものことがあったら、妹の、ティアナのことを頼む」

「そんな事言うなよ！！」

その言葉を聞いたアキナは、少しの間、うつむく。

なんとなくではあるが、嫌な予感がした。目の前にいるティードがどこかへ行ってしまいそうな、そんな感じ。

しかしアキナはそんな考えを吹き飛ばす。

縁起でもない。そんなことは考えてはいけないと必死に違うことを考えた。アキナは顔を上げ、いつものように笑う。

「そつか。なら仕方ねえな……でも、絶対帰って来いよ！！俺まだ
ティーダに教えてほしいことすげえあるんだからな！！」

ティーダもソレを見て笑う。

「ああ。絶対帰ってくる」

「約束だぞ！！」

アキナは拳を前に突き出す。それにティーダもあわせた。

「ああ、約束だ」

その後ティーダは逃走した違法魔導師の追跡・捕縛へ向かい、その
まま帰ってこなかった。

そのことを上司が非難し、『その死は不名誉で無意味だった』とい
った話は管理局内でも問題になり、アキナの耳にも届いた。

第14話
兄の想い

六課の隊舎の一室。
アキナはベッドの上でぐんと伸びをした。そして一つ大あくびをする。

「随分、懐かしい夢を見たな……」

ぼそりと呟く。
ティードと最後にあった日。あの日を境に、俺は管理局に入ろうと決めたんだ。しかしティアナのことを頼むって……そんなことを頼まれてたのか……

そのままの状態ではボーとしていると、通信が入った。

『アキ兄起きてる？』

そこへ現れたのはスバル。どうやら起こしに通信を入れてくれたらしい。

「起きてるよ」

『おお、珍しい』

「なんだそりゃ……お前は準備出来てるのか？」

『うん！もうかなり前から！』

「ティアナは？」

『ティアナは……もう少し寝てるって。10分前になったらおこしてくれて』

おいおい、10分って。あいつそんなに疲れて……ああ、そうか。アキナは原因を考え、すぐに納得した。ティアナは最近ハードスケジュールな訓練の後さらに自主トレーニングを入れている。あるところによると、夜かなり遅くまでやっているらしかった。

「そうか……遅れなきゃいいけどな」

『大丈夫。あたしが起こすから。それよりアキ兄も早くしなよ？あと20分だよ』

その声を聞いてアキナはバツと起き上がる。

「ああ、すぐ行く」

それだけ言うと通信を切り、身だしなみを整え部屋から出て行った。結局ティアナは5分遅れて早朝訓練に来た。

いつものように1日の訓練を終え、皆でダウンをする。皆で談笑しながら、反省点や良かったところなどを言い合っていた。そのなかで特に何も話さないティアナを不思議に思ったアキナはティアナへ話しかけた。

「どうだ？最近がんばってるみてえだけど」

「……いえ、別に。何もありませんよ。何か用ですか？」

冷たい反応だな……オイ

「その、なんだ。あんまり根つめすぎると体壊すぞ。今日も遅れてきたんだろ？無理するなって」

「………放っておいてください。これから自主トレもあるので先に失礼します」

「あ、おい！」

アキナの言葉も聞かず、隊舎とは別の道に歩いていくティアナ。見るからに顔色も悪く、足取りも悪かった。

「ったく。アイツいつかぶっ倒れるぞ」

「ティアさん、今日どうしたんでしょ？訓練に集中してて尊敬はするんですが……疲れが凄い。明日の訓練は休ませたほうがいいと思います」

エリオの言葉にスバル以外全員が頷く。

「このあいだお風呂であって聞いてみたんですけど、今度は絶対やらなきゃならない、って言われちゃって……ちょっと怖かったです。やっぱり、お兄さんの……？」

キャラが俯きがちに答えた。ティアナの過去は全員が知っている。この間、スバルと共に話した。ティアナの様子がおかしかったときに、だ。もちろんエグイ場所は伏せたが……重いことには変わらない。ちびっ子達も覚えているだろう。しかしキャラにぐらい、やさしくなると思っていたが大違いだったようだ

「スバルは、何か聞いてないのか？」

「あ、あたしも特には……あ、でも『証明、するんだ』って寝言で言

「つてたよ」

証明、ね。

最近、ティアナとは話さねえし、分からないことも多い。ここはスバルを尋問するか……。パートナーだし、さっきもってたし絶対何か知ってるはずだ。

「んあ、スバル。お前、アイツのこと何か知ってるだろ？パートナーなんだし」

「し、知らないよ!？」

「慌ててるし」

「あわててにやいもん!」

「噛んだし」

「あつう……」

脈あり。

おそらく何か知っているはずだ

「ほら、吐いちまえ」

スバルへ追い立てる。

「うづう……お願い！今回は見逃して！！明日、結果は出すからさ！！」

しかしスバルはソレを避けてしまった。

「明日……模擬戦の日か」

明日は模擬戦の日。

最近のトレーニングのテスト……のようなものだ。明日はスバルとティアナ。次はライトニング、最後に俺の順番だったはずだ。それにしても明日証明するということは、何か考えているのか……へんなことをやらなければ良いが

「明日、わかるんだな？」

「うん」

「分かった。明日まで待つわ」

アキナは頷き、納得する。が、一つ付け加えた。

「でもスバル、上官の、なのはさんの期待を裏切るような、教えを無視するようなことはするなよ？」

一瞬スバルの顔がこわばったような気もしたが、気のせいであると信じたい。

なんとなく、嫌な気がするが、何があるうが明日は来てしまう。俺は待つことしかできない。心配ではあるが何もできない。

そんなとき、スバルが聞いてきた

「ねえ、アキ兄はなんでティアのことそんなに気にかけてるの？」

「俺さ、頼まれたんだ」

「誰に」

「それは言えねえ。ただ、すげえ大事な人でもうこの世にはいねえんだが……」

「そっか……」

あたりが少し暗い雰囲気包まれる。

そのことに気づいたアキナは、全員に言う。

「ほれ、てめえら！早く風呂入って飯食うぞ！スバルなんかは明日模擬戦なんだから、今日は寝ろよ」

「う、うん。で、でもあたしティアのところ行くから！」

そういつてスバルはティアナのほうへ向かった。アキナは肩をすくめ、ライトニングを引きつれ異動する。結局、スバルとティアナが帰ってきたのは4時間後の夜暗くなつてからだった。

翌日

アキナはスバルとティアナがやっている模擬戦をビルの上から見ていた。

明日結果が出る、とスバルが言っていたわりには動きが悪く、どちらかといういつものほうが動きがいい。

「なにやってんだあいつら……動きがめっちゃくちゃねえか」

フェイクを入れるべきところでフェイクを入れなかったり、弾丸にキレがなかったり…

まさか、あいつらが言っていたのはこういうことか？

「でりゃあああああ！…！」

フィールドを見るとスバルがなのはさんにつっこみ、ティアナが横から砲撃で狙っている……ように見えた。
しかし

「偽者!？」

それはフェイク。本物のティアナはスバルが作ったウィングロードを駆け上がり、なのはさんの後ろを取っていた。

しかしそれは本来ならばおかしい。

トップをスバルが張り、囷になるのは良いとしよう。だがティアナがトップまで出てくるのは意味がない。本来ならセンターガードは味方トップスのフォロー。中遠距離から隙を狙うはず。近距離にはいったところで何もできない。いままでもそう訓練してきたはずだった。しかしティアナはトップにまで出てきてなのはさんの後ろから自らの銃型デバイスをダガー状態にし、襲い掛かっている。これはどういうことか……

「一撃必殺!! てえええい!!」

考えるより早く、体が動いていた。

ティアナがなのはさんの後ろへ入り、襲い掛かる瞬間、アキナは自らの体をガードで吹き飛ばしなのはさんとティアナの間に入った。そして襲い掛かるティアナのダガーを片手で受け止め、スバルの体を抑える。

いきなりでできたアキナに驚きつつも、なのははアキナに問う。

「なにをするのかなアキナ君。私の教導中だよ？」

「ええ。そうっす」

「なら、出て行ってくれないかな」

「いや、ちょっと断らせてもらいます。こいつらには、俺がやらせてください」

アキナが今までとは違う低い声で答えた。周囲の空気が凍りつく。

「アキナ君には関係ないでしょ？」

なのはが再び問いかけると、アキナは顔を上げ、いままで見せたことのない顔をしてなのはをにらみつけた

「良いから俺にやらせる……！」

いつもは絶対出さないような怒号を前に、周囲にいるメンバーはもちろん、外から見ていたものたちも驚いた。

「いいよ。分かった。でも、後で話は聞くよ」

「ありがとうございます」

なのはに向けていた顔をスバルたちに戻した。それだけで二人は悲鳴を上げる。

「おい、ティアナ。どういうことだ。おい、スバル、こりゃなんだ。昨日言ったよな？上官のことは無視するなって。教えを無視するな
って」

あまりの気迫に二人とも言葉を失った。

「お前の言ってた結果がこれか？おい、スバル」

「あい、いや……」

スバルがたじろぐ一方、ティアナは我を取り戻しダガーを収め体勢を立て直すとアキナを睨んだ。

「アキナさんには、分かりませんよ」

「何が」

アキナはティアナの言葉を突っ返す。
するとティアナは声を荒らげ、叫ぶ。

「凡人のあたしの気持ちなんて。あたしは、やらなきゃいけないことがあるんです！！証明しなきゃいけないんです！！！！」

ソレに対し、アキナも叫ぶ。

「ああ！！？証明する！？この間違った力をか！！ふざけるのもいい加減にしろ！」

「それでも！やらなきゃならないんですよ！！！」

アキナはその言葉を聞いて、一度だけ舌打ちするとティアナをにらみつけた。

「じゃあ、証明してみろよ、その力。教えられたことを使わず、自分が作ったその力を」

「ええ、やってやりますよ！！そのかわり、1対1の勝負。時間無制限。どちらかが戦闘不能の時点で終了です」

「戦闘不能？そんなことならねえよ。俺を一步だけでも動かせ。ソレができたらお前の力があるって認めてやるよ。少なくとも俺はな」

「なめないでください」

「なめてねえよクソガキ」

戦いの火蓋は落とされた。

「おいおい、こんなものかよ、てめえの力は」

「クッ！」

アキナとティアナの模擬戦は開始して5分がたっていた。ティアナは多くの弾丸をアキナに打ち込んでいた。しかしそのすべてははじき落とされ、一発も通らない。しかしそれはアキナも同じ。

ガードのランスを使い攻撃するが、ティアナはソレのすべてを避け
ていた。

「そろそろ、つぶしにかかるぞ?」

「望むところです」

アキナはその言葉通り、一斉に攻撃を開始する。

まず上空に設置しておいたガード・フォールを一斉に落とす。そし
ティアナの攻撃を撃ち落とし、さらに攻撃に転じていた。その場を
一歩も動かず、すべてを対処する。

一方ティアナはアキナの攻撃を避けることで前段回避していた。し
かし、避けるたびにその場所にガードが落ちてきて、ソレを考えさ
らに移動するとそこへランスが飛んでくる。なかなか攻撃するチャ
ンスが生まれず、一歩どころか一撃も当てられない。

「おい、ティアナ。センターガードってのは移動しないほうが良い
んだ。なのはさんの教えだろ?」

「そう、ですね!」

余裕なアキナに対しティアナは必死だった。

(このままだと埒が明かない。射撃はすべて落とされるし、もう避

けるのも限界。……接近して一撃入れるしかない！！）

ティアナは口元に笑みを浮かべた。近くに身を隠し、移動した後に自らのスキル、幻影を発動。

ダガーを作成し、幻影を駆使しつつ、アキナに接近した。完全に死角に入っていて、まだ気づいてないと思える。ティアナはダガーを振り上げ、アキナの首元に近づける。

勝った！！

そう、思ったとき、前から声がした。

「おまえさ、接近戦教わってないだろ」

「えっ？」

振り向くと同時にガード・アタックを発動させたアキナは、全力でティアナの腹に一撃を入れる。

「うづぐっ……くぁあ……」

痛みでうめくティアナ。

「どっする？やめるか？」

「やめ、ませんよ……あたしは、証明するんです……この、力を……」

ティアナはよろよろと立ち上がる。

「なんで、それにこだわる？」

「あたしは、もう、誰も傷つけないから……誰も失いたくないから……だから……強くなりたいんです……」

自分の傷も忘れ、尚立ち向かおうとするティアナをアキナは一瞥すると、一度だけため息をつく

「証明するのは自由だ。だが……だが上官のことは無視しちゃいけない……おまえさ、似てるな。」

アキナは懐かしそうな目でティアナを見ると、一度だけ顔をほころばせる

そしてティアナに言う。

「やっぱり……だから、少し頭冷やせ」

手を上げ、ティアナの周りを座標指定。

「カートリッジロード」

ティアナの周りをガードが取り囲むと、そのままティアナをすっぽり覆ってしまった。

驚くティアナを横目に、アキナは言う

「エクスプロージョン」

刹那、大爆発が起きた。

第14話 兄の想い（後書き）

魔王なのはさん登場せず。笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2648y/>

ある守護者の話。

2011年12月24日01時50分発行